読書科学

第10巻 第4号（通巻 第38号） 昭和42年11月10日 発行（季刊）

年報 1966年の読書界

読書科学の研究	村石 昭三
	室伏 武
	古野 有隣
	佐藤 泰正
出版界の展望	河北 憲夫
	今村 秀夫
	黒沢 浩
	谷川 澄雄
公共図書館の読書運動	植田喜久次
年間時潮	北島 武彦
海外情報	高木 和子

38

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

読書科学の研究

教育学的研究（Ⅰ）読解指導　村石昭三　1

（Ⅱ）読書指導　室伏武　6

社会学的研究　古野有隣　11

心理学的研究　佐藤泰正　18

出版界の展望

一般図書　河北憲夫　24

児童図書　今村秀夫・黒沢浩　28

児童雑誌　谷川澄雄　33

読書運動

公共図書館　植田喜久次　37

年間時湖

国内情報　北島武彦　42

海外情報　高木和子　47

会　報　50

総目次　53

日本読書学会役員

会　長（理事長）阪本　一郎

常任理事	大内　茂男	岡田　明	岡本　奎六	加賀　秀夫	阪本　敬彦
	佐藤　泰正	滑川　道夫	波多野完治	平沢　薫	福沢　周亮
	村石　昭三	山本　晴雄	室伏　武		
監　事	深川　恒喜	望月　久貴			
理　事	井口　忠司	井沢　純	石森　延男	裏田　武夫	大西誠一郎
	岡田　温	尾原　惇夫	加賀　栄治	楮本　良平	金沢　孝
	叶沢　清介	蒲池　正夫	久保田彦穂	小針　孝哉	西藤寿太郎
	佐藤宏之助	佐藤　貢	清水　慶子	清水　正男	竹内　実次
	西村　友円	芳賀　純	花田　哲幸	古野　有隣	藤田　圭雄
	本間　康平	松村　康平	松本　茂	嶺　光雄	三輪　計雄
	三輪　和敏	森田　宗一	弥吉　光長	渡辺　茂男	渡辺　正亥
	渡辺　正巳				
「読書科学」編集委員		阪本　一郎	滑川　道夫	波多野完治	平沢　薫
	深川　恒喜	山本　晴雄			

読書科学の研究

教育学的研究（1）読解指導*

国立国語研究所　村　石　昭　三**

本項にあげた文献リストは，国立国語研究所編「国語年鑑 '67」（秀英出版）の所収する件名カードにしたがって作成した。そして研究展望は，教育科学国語教育，国語教育研究（以上，明治図書）の雑誌を中心にしかも話題的に構成したものである。それゆえ，この方向とはちがった他の単行本，雑誌（教育国語，実践国語）など所収の論文には紙面の制約上ここにとりたててあげるまでになっていないことを読者におことわりする。

'65年度から '66年度へ

昨年度（'65年度）の読解指導の動向として，本稿では，

話題的には，児言研の一読総合法とそれに対する批判，輿水実の基本的指導過程論など，あるいは民間教育団体の読解をめぐる論争などにぎやかな幕はあき，そして幕は閉じた。一方，中沢政雄をチーフにした国科研（国語教育科学研究会）の実験授業といった地道な成果も注目された。

と述べた。では，'66年度はどうであったか。

上述のように，筆者は指導法論争に「幕は閉じた」と述べたが，今にしてみれば，少々うかつであった。動向に対する予見に誤まりがあったことを反省しているが，その論争は実は本年度もひきつぐことになったが，内情的には若干異なる方向に進みつつあると判断している。すなわち，互いに論争を通じての黒白論争は手控え気味にして，重点は，それらの理論固めと授業実践を通しての証拠固めという方向があらわになってきたといえるであろう。いっぽう，国語科教育のなかでは，学習指導要領の改訂がようやく山にさしかかりつつある年ではあったが，その影響と問題凝視はこの系列上にある雑誌の紙面上ではあまり感じられなかった。

ここ数年の読解指導の話題は「指導過程」で通ってきている。鈴木敬司 (66) は，戦後国語教育実践20年の現実と課題というテーマで読解指導にふれ，読解指導の動態に加えて，ソビエト教育学の「指導過程」が日本に紹介され，授業研究が盛んになって，「何を，どのように」という話題が「どのように」一本に注がれるようになったという。まことに，「どのように」は読解指導の焦点化された話題になったが，それだけに，読解指導の他の側面にある「地道な科学研究」が軽くなっていることに気づく。その中で，国科研の同一教材による読解指導の比較研究や読解と思考との関連 (77) (18) (39) (50) の研究は本年度もひきつがれているほか，日本読書学会が文部省の科学研究費により，読書能力の開発に関する研究をとりあげているのは，その意味で注目されるところである。

読解指導過程に関する論争は，雑誌「教育科学国語教育」「国語教育研究」「教育国語」の中でにぎわしているが，雑誌以外でも，教研集会での話題になっているといわれる。山口信三は日教組教育研究集会レポートの分析，紹介を国語教育研究 No. 7 でしているが，レポートに現われている指導過程を大別すると，いわゆる三段階方式（三層読み――教科研）と一読総合法（児言研）のふたつである。各県での実践記録を概説した上で，ふたつの指導過程について，「いずれもまだ，結論をだす段

* Educational Studies on (1) reading apprehension

** MURAISHI, Shōzō (National Language Research Institute)

階ではないようであるが，このような実践に即した研究を重ね，検討していくことによって，いかなる方法が最もよいのか，あるいは目的により，教材によって，方法を変えるべきなのか，など明らかになるであろう。」と述べている。科学的な立場での評価はさらに将来に持ちこすことになろう。

一読総合法をめぐって

一読法・三読法は対立的なネーミングであるだけに，ジャーナリズムの話題となりやすい。(3) 一読総合法は一回だけ読むのかといった常識的批判は影をひそめた。児言研 (7) では基本的な図書「一読総合法」を刊行し奈良小学校 (76) では，「一読総合法の授業分析」を刊行したが，児言研での当事者たちの関心は，教育科学国語教育にみるかぎり，一読総合法の主要な軸にしている「表象形成」「関係づけ」などの概念整理に関する論文が目だつ。林進治 (11) の「読みにおける関係づけとその考察」の提案では，読みの本質にふれ，石山修平は体験構造がそのまま文章の構造だと云っているが，そうは思わない。文章はそういうものでなく，最初から判っているものをことばに変えていくというのではなくて，最初の発想というものがしだいに流れていく間にことばを得，分析され，総合されていく過程でひとまとまりの思想が作り上げられていくというようなものだ。」と述べている。この点では大方の承認をえているが，さて，そこから，読みの本質がそのようなものであれば，読みにおける通読は果たして必要かどうかという問題に発展する。

通読の必要性の有無は問題の契機として，一読総合法と他の指導過程論とを区別する争点となっており，教育科学国語教育では，「説明的文章の読解で導入段階で全文通読が必要か」(20) (38) という特集をした。一読総合法について，小林喜三男は通読は不必要，ときに有害でさえあると述べ，段階読みの立場（田村正己），基本的指導過程の立場（小川末吉），プログラム学習の立場（宮川利三郎），機能的国語教育の立場（中沢政雄），主体的学習の立場（大原輝夫）では，いずれも通読は必要であるという見解をとっている。

もっとも，一読総合法，主体的学習の立場は両者とも，「はじめに読み手ありき」（「はじめに文章ありき」と対照させて）をキャッチフレーズにしているが，通読の必要性に関しては対立した見解をとっているところをみると，指導過程を規定するものは何かが討議されなければならぬ。教育科学国語教育では「指導過程を規定するものはなにか」(15) の特集をくんでいる。それについて井上敏夫は生活的な読み，渡辺宏は教師と子どもに横たわっている非連続的なコンテクストを弁証法的にとらえること，村松友次は読み手主体の心唯過程，黒滝チカラは言語と認識が指導過程を規定すると述べている。読みを文章中心におくか読み手である児童中心におくか，また両者の働きあうところに視点をおくかによって分かれるようである。

文学的教材と説明文教材とで指導過程はことなるかということもひとつの課題である。指導過程は異なるが読みの本質は同じという立場と，読みの本質，指導過程とも同じだという説とその反対の立場などいろいろとある (73)。いずれも言語でいえば，ラングでみるか，パロールでみるかという問題の分岐とも関連する。

指導過程の歴史的検討も文化遺産の継承か否定かの問につらなることとして必要なことである。飛田多喜雄は注訳主義の指導過程，野地潤家は形象理論，林進治は解釈学，蓑手重則は芦田教式，中沢政雄は戦後の指導過程にふれている (13)。

望月久貴 (40) は明治初期の文章読解教授法に論及している。

第2の争点は，行動主義的な立場からみれば，読解授業における児童の発言の問題である。一読総合法の授業では，たしかに児童の発言は活発であることが，多くの参観者の体験するところであるようだ。発言調査によれば，三読法では指名発言が各時間とも多く，教師による子どもの授業への参加は積極的であることは認められるが，児童の自由発言が少ないのが問題であること，逆に一読総合法では児童の発言が多く，一回の発言の長さを

みると，一問一答のあれか，これかの発言とは異なり，発言の長いのが特徴といったことが指摘されている。もっとも，それが何を意味するかは今後の課題だとみなければならぬだろう。児童の発言が多ければ主体的な読みが行なわれているとみることができるのか，教師の発言が多ければ，教師のおしつけが強いとみることができるのか，児童の発言は指導技術によってでてきた，要するに行動的な反応でないかどうかという問題などなどがある。

心理学者の発言

指導過程に対する心理学者の発言として，波多野完治(9)が奈良小公開研究会（6月25日）で特別講演した内容が注目される。かれはまず，現代心理学の特徴にふれた上で，読みの構造と一読総合法に及ぶ。読みとは静的なものを動的なものに変える過程，弁証法的な過程であると述べ，石山理論は三層構造をそのまま固定して，読みの教育に定着させようとしたものだ。一読総合法はユニットをひとつの文章の単位になる部分の内部に求めることによって，この三層構造を実現していこうと考えたと理論づけをしている。そして三読主義とはちがったものの，発想，発見であるとし，「閉じられた教育主義の読解法ではなく，開かれた，真に科学的な読み方理論である，」と結んでいる。

もっとも，そのユニットのとり方に今後の課題があるとし，また，一読総合法の評価を現行の他の指導過程との比較の上で行なった結論でないことには注意しなければならぬであろう。

基本的指導過程

読解の基本的指導過程は輿水実によって提唱されたが，昨年度にひき続いて大きな話題の中心となった。その趣旨「個々の指導過程の根底にある共通の指導過程である。指導過程はめいめいのやり方を持っている。また，教材によって，それぞれ多少違ったことをする。しかし，その根底にある，根底に考えられるひとつの指導過程，そういうものを基本的指導過程とよぶ。」は，多くの教師によって興味と関心をよぶことになった。

教育科学国語教育では，「基本的指導過程は成立するか」という特集をくみ，砂沢喜代次，吉田昇，飛田多喜雄，望月久貴ほか(41)(56)の各氏の批判を記述させたが，のち，その批判に対する批判は輿水実によって誌上発表された。

これに対する一読総合法の立場からの批判も多く行なわれたが，逆に一読総合法への見解が輿水実(27)によって行なわれたのは，「読解学習の改造」であり，①アメリカは一読法かという問題への回答（本当は再読法であること）②読解学習指導の場にいろいろな他の学習指導を持ちこまないこと，③主題の押しつけなどやめること，についてふれている。なお，波多野完治(10)には「アメリカの一読総合法」という論文がある。読解指導過程のインターナショナルな位置づけとして注目される。

別に読解指導過程として注目されるいまひとつのものは構造論である。沖山光(55)の「意味構造にたつ読解指導」の展開がある。また，三枝康高(57)の単行本など。

読解指導と読書指導

読解指導・読書指導の同床異夢的な違和感は'66年度においても解消されなかった。読書指導を行なうものにとって，読解指導過程論争はどのように映ずるのであろうか，逆に，読解指導に没頭する者からみた読書指導研究家の見解はどう評価されるであろうか。これに関する一読総合法対石井桃子をめぐる，ある記事はこうである。

「ムギと王さま」（ファージョン作，石井桃子訳）を一読総合法実践家が教材としてとりあげるについて，石井桃子は「ムギと王さま」は，教材としてネチネチと扱うものでなく，子どもがすなおに読んで楽しめればいいものではないか，という意味のことを言われた。石井さんの頭には，現行教科書で，現在の教え方が考えられて

いて，その上での感じと考えられるのであるが，ぼくらは（一読）総合法による取り扱い――子どもの文章に対するイメージを十分に展開させつつ読ませ，いわゆる主題読みに中心作業をもってこない――によれば，十分に教材として生かされると思ったのである。石井さんのご意見は別にして，文学の作品を，すなおに読む，寝ころんで気楽に読んで，そのおもしろさ，美しさをすなおに感じられればいい，それが美しければ，おもしろければ，心のどこかに印象づけられて，いつか思いだしたり心の糧としてたくわえられると考えるようなことがある。しかし，さっと読んで美しい印象をたくわえられるようになるためには，ザッとしたことがら，あら筋が分かっただけではだめであり，部分の珠玉性が伝わるためには，作品全体におけるその部分の珠玉性がはっきり定位されなくては不十分である。（以下略）

いささか，長い引用になったが，読解指導と読書指導を考えるひとつの契機になるであろう。読解の指導過程に関して，読書指導家からの見解の開陳があらためて期待されるものである。

文献リスト

1. 青木幾哉・大原誠・斎藤義光・宮崎健三・早坂礼吾・中村格（司会）：<座談会>読解と鑑賞，国語通信（日本書院），'66—4　21　6～21
2. 新井哲雄：要点を読みとる技術の発達　国語教育科学 '66—4　6—4　8～12
3. 朝日ジャーナル：一読法と三読法 '66—8.7　8—33　46
4. 福田康夫　鈴木喜代春：新しい読書指導――学校・家庭・地域ぐるみの活動――新評論　41—7
5. 古田拡：国語教室の創造のために47　一読総合法を評す（完）教育科学国語教育 '66—1　8—1号　107～112
6. 古田拡：文脈の二義　—論理的・心理的ということ—　教育科学国語教育 '66—2　8—2　110～114
7. 古屋敷和也：疑問をただしていく読解導指――「一飛び」の場合――実践国語 '66—6　27. 319　18～21
8. 後藤亮介：説明的文章指導の一考察　山形教育 '66—12　119　41～48
9. 波多野完治：現代心理学からみた一読総合法（奈良小公開研究会特別講演）国語教育研究 '66—9　3—3　156～163
10. 波多野完治　アメリカの一読総合法――トランスの創造的読みの理論とは――総合教育技術 '66—11　21—9　82～86
11. 林進治・饗場一雄・石川二三子・小松善之助・高橋和夫・武部優子・辺見兵衛・益子広則・松山市造・村松友次（司会）：<座談会>読みにおける関係づけとその指導　国語教育研究 '66—6　3—2　7～39
12. 林進治：一読総合法のめざすもの　教育研究(初等教育研) '66—9　21—9　12～15
13. 〔特集〕読解の指導過程を規定するものはなにか指導過程の歴史的検討，教育科学国語教育 '66—10　8—11　33—62　飛田多喜雄：注釈主義の指導過程：野地潤家：形象理論に立つ指導過程　林進治：解釈学による指導過程　蓑手重則：芦田教式による指導過程　中沢政雄：戦後の指導過程（導入・展開・終末）
14. 稲田宏：「はだかの王様」を中心とした物語的教材の取扱い　実践国語 '66—6　27—319　41～43
15. 〔特集〕読解の指導過程を規定するものはなにか，教育科学国語教育 '66—10　8—11　5～32　井上敏夫：生活的読みを中核として　渡辺宏：教授と学習の統一的把握　村松友次：読み手主体の心理過程に即して　黒滝チカラ：言語と認識とが規定する
16. 岩下忠男：読解における学習態度の形成—その2，学習態度と学習効果—　研究紀要（茨城県教研） '66—3 55 1～24
17. 児童言語研究会：一読総合法入門　明治図書 '66—9
18. 鏡雅次：読解における思考過程に関する研究—小学校6年物語文教材の指導を中心に—研究紀要（群馬県教育研） '66—2　23　63～74
19. 香取彦夫：説明的文章読解の指導過程　実践国語 '66—3　27—316　35～38
20. 〔特集〕説明文指導の導入で全文通読が必要か説明的文章の読解で導入段階に全文通読が必要か，教育科学国語教育 '66—2　8—2　5～25　小林喜三男：一読総合法の立場から　田村正己：段階読みの立場から　小川末吉：基本的指導過程の立場から
21. 小林光子：物語文の指導—初読の段階を中心に—実践国語 '66—12　27—325　74～77
22. 小池郁夫：読解指能をつける学習過程　実践国語 '66—6

27—319　38～41

23. 小松善之助：説明文読解指導の構想　明治図書 '66—9

24. 小松善之助：〔シンポジウム提案〕一読総合法による説明文読解指導　鋭く，正しく，批判的な読解能力をめざして一基本作業へのいくつかのつけ加え一　国語教育研究　'66—9 3—3　7～19

25. 小松善之助：（シンポジウム）ご意見を読んで　国語教育研究 '66—9　3—3　44～46

26. 小室善弘：論説・評論における第一段落とその展開　実践国語 '66—10　27—323　10～14

27. 興水実：読解学習の改造　教育科学国語教育 '66—10　8—11　126～131

28. 説明的文章の読解と直観教材の関連　教育科学国語教育 '66—2　8—2　59～70　小竹省三：表現のイメージ化からイメージの表現化へ　大矢邁：直観教材の利用には限度がある

29. 小竹省三：読解学習形態の改造　明治図書 '66—9

30. 小山清　中洌正堯　末宗邦夫　山田夏樹　伊藤隆弘：（共同研究）読解指導における図式化　国語教育研究（広島大）'66—9　12　43～63

31. 黒滝チカラ：読み方を教える手順一まず一読法と三読法とを検討して一　教育科学国語教育　'66—5　8—6　64～72

32. 技術研究会：一読総合法と言語要素とりたて授業一横浜市立奈良小学校参観記一　総合教育技術　'66—7　21—5　120～124

33. 京都市教育研究所：「段落の要旨を読みとる能力」を測定するテスト形式についての研究 '66—3

34. 丸野平一郎：文学的文章の読解をどのように進めるか　実践国語 '66—12　27—325　77～81

35. 増岡明　海老原務　大島三千代　関口幸男　谷小夜子　東房国雄　針谷康信〔共同研究〕：説明文の機能的読解と作文　実践国語 '66—12　27—326　1～35

36. 小松提案への意見〔シンポジウム〕国語教育研究　'66—9 3—3　20～43　松山市造：基本作業の整理を　野村純三：説明文読解法の前進　山下七郎：主体的読みをそだてる基本作業　益子広則：「コトバの魔術やぶり」へのみごとな指向

37. 三橋誠一：読解と作文の関連指導法を求めて　実践国語 '66—4　27—317　32～35

38. 説明的文章の読解で導入段階に全文通読が必要か　教育科学国語教育 '66—2　8—2　26～46　宮川利三郎：プログラム学習の立場から　中沢政雄：機能的国語教育の立場から　大原輝夫：主体的学習の立場から

39. 茂木悦郎・折茂圭三・南雲寿美雄：物語文の読解指導過程に関する研究一子どもの思考過程を中心として一　研究紀要24（群馬県教育研）'66—5　29～56

40. 望月久貴：明治初期文章読解教授法について　国語科教育 '66—3　13　33～40

41. 中沢政雄：説明文教材等の基本的指導過程を検討する　教育科学 '66—1　8—1　38～43

42. 中沢政雄：国語教育における説明文読解指導の意義と今後の問題　国語教育科学 '66—9　6—9　4～17

43. 中沢政雄：要点の科学　国語教育科学 '66—10　6—10　15～23

44. 中沢政雄：段落の科学　国語教育科学 '66—12　6—12　14～25

45. 中村昌司：「現代国語」において読解力を高めるための指導はどのようにしたらよいか　国語研究12（新潟県高校教育研）'66—3　116～130

46. 中津留喜美男：読解能力の指導　国語教育科学 '66—1 6—1　31～36

47. 野田弘：表現過程の追跡法一その筆者想定とはなにか一〔問題提起〕実践国語 '66—3　27—316　61～64

48. 野田弘：筆者想定は学習指導にどう変化をもたらすか〔問題提起〕(2)　実践国語 '66—4　27—317　64～68

49：野田弘：筆者想定(3)一その思想一　実践国語　'66—5　27—318　70～73

50. 野地潤家：文章の読解過程における訓練（思考力養成の訓練をどう計画すべきか）教育科学国語教育 '66—8　8—9　13～19

51. 野中幸夫：基礎となる読解技能の指導計画(一)　実践国語 '66—12　27—325　106～113

52. 岡崎義恵：読解と鑑賞　国語通信（日本書院）'66—4　211～5

53. 岡村美智子：長文の文学作品の多角的読解指導　実践国語 '66—2　27—315　23～33

54. 沖浦悦夫：読解過程における文章単位の承接に関する理解

について　信濃教育 '66—11　960　66～73
55. 沖山光：読解のひとり歩き　明治図書 '66—4
56. 大槻一夫：文学教材の基本的指導過程を検討する　教育科学国語教育 '66—1　8—1　32～37
57. 三枝康高：文学教材の構造をつかむ読解　明治図書 '66—2
58. 佐野哲也：説明的文章において文章内容の追求をどのように行なったか—小三「月のかんさつ」の場合—　実践国語 '66—3　91～108
59. 佐々木郁郎：読解と作文指導の一考察　実践国語 '66—4　27—317　28～31
60. 佐々木郁郎：説明文の読解指導（問題意識に立つ読解指導）実践国語 '66—6　27—34　27～319
61. 佐藤・三木岩：説明的文章読解における指導課程の研究—中学校三年生の論説文の要旨把握を中心として—　研究紀要23集（群馬県教育研）'66—2　39～50
62. 沢田光蔵：低学年の説明的文章における読解の発展過程(1)　実践国語 '66—4　27—317　22～27
63. 沢田光蔵：低学年の説明的文章における読解の発展過程(2)　実践国語 '66—6　27—319　3～8
64. 志波末吉：中学校の読解指導　明治図書 '66—9
65. 下山敏勝：読み方教育における文の指導　教育国語 '66—12　7　46～59
66. 鈴木敬司：読解指導の問題点—戦後国語教育実践20年の現実と課題2—　教育科学国語教育　'66—2　8—3　128～135
67. 田尻史朗：難解な文章の読解指導　実践国語　'66—6　27　319　14～17
68. 田尻史朗：聞く話す単元における読解—単元目標に即した具体的学習指導過程の探求—実践国語　'66—12　27—325　63～71
69. 〔主題〕説明文指導の基本的問題点　実践国語　'66—9　322　45～77　高木克己：説明的文章の段落指導　佐々木郁郎：説明文の文体研究　高橋清文：説明文の指導　松田正雄：説明文指導における基本的問題点　横山貞作：説明文と詩や物語の読解について
70. 藤乗栄：文学教材の読解指導の研究—読解操作に重点をおく読解指導における—考察—　研究紀要（群馬県教育研）'66—2　23　51～62
71. 時枝誠記・若宮貞次・中田民夫・林武男・後藤栄・石田圭介（司会）：〔座談会〕たどり読みの方法—時枝先生を囲んで—　とうきょうの国語 '66—4　3—5　1～4
72. 和田史雄：表現過程に立った読解・鑑賞指導発展のために(一)—その問題点と解決—　実践国語　'66—12　27—325　81～84
73. 文学教材と説明文教材の指導過程をめぐる問題点　教育科学国語教育　'66—2　8—2　47～58　渡辺宏：教育観が指導過程を決定する　高橋和夫：文章形態は指導過程を決定しない
74. 八幡孝彦：作中人物の心理にどのようにして近づくか—初読の段階の場合—　実践国語 '66—6　27—319　43～47
75. 八幡孝彦：初読の段階における感想について　実践国語 '66—12　27—325　71～73
76. 横浜市立奈良小学校：一読総合法の授業分析　明治図書 '66—5
77. 吉沢輔雄・林進治・沖田千尋：特集「読むこと」における思考Ⅰ～Ⅲ　国語教育（三省堂）'66—5　8—4　6～18

教育学的研究（Ⅱ）読書指導*

亜細亜大学　室　伏　　武**

概　観

この分野の研究や実践報告は，前年度に比べて大きな進展がみられる。そして，これらの動向は，教育課程の改訂作業の影響もあって，特に国語教育を中心とした報告が目立っているといえよう。

（1）　良書推せん

本年度の最も大きな収獲の一つは，いろいろな良書推せんの図書が刊行されたことである。子どもの本研究会(18)，矢崎・神宮(47)は，ともに児童文学の立場から

すぐれた仕事をしている。そして，これらは共に就学前から小学生までを対象としているところに特長がある。こうした研究が，国語教育や図書館の立場から，また中・高校をも対象とした図書リスト（解題つき）が刊行されることが今後に期待される。もっと欲をいえば，国語教育，文学教育，図書館や児童文学などの関係者の総合的な協力による総合的な読書指導の立場から研究がなされることを希望する。

（2） 一般図書

近年になく多くの図書が出版された。大浦猛等(7)は，学級担任としての読書指導について，合田修等(16)は，お母さんを対象として，瀬田貞三等(31)は子どもの絵本の研究を，福田・鈴木(43)は，旧著を改訂し学校・家庭・地域ぐるみの読書指導の実践報告を刊行している。これらの中，瀬田貞三等(31)のものは，子どもの絵本の研究とその指導の手びき書としてすぐれたものであり，特筆すべきものであるといえる。

このほか，高校生を対象として文学作品の読み方を中心に展開した杉山康彦(29)や，青少年の「生きるための読書」を中心とした関茂(30)のものがある。

（3） 雑 誌

「学校図書館」と「児童心理」の二誌が読書指導を特集している。前者は読書指導とは何かということで，後者は本を読む子・読まない子というテーマである。また「実践国語」は読書感想文の指導の問題提供という形で，それぞれの立場で展開されている。

「学校国書館」は，文学教育，国語教育，生活指導，科学教育と学校図書館とそれぞれの立場における読書指導の特性や方法，あるいは問題点を論じている。渋谷清視(27)は，文学による感情体験を組織化する文学教育は文学の授業と文学の読書指導が車の両輪のような関係をもって構造化されるものであり，読書指導は文学の読書指導であると指摘し，長編文学の扱い方と文学作品の選ぶことの二つの問題点を提起している。倉沢栄吉(15)は，国語教育における読書指導を「読解指導」と「読書指導」との関係において論じ，読書—読解—読書と読解—読書—読解との相互交流的な指導のあり方にその本質を求めている。最近，読書指導と読解指導との差異や同一性について論議されているが，この問題の解決に一読すべき好論文である。このほか板倉聖宣（6）は，科学教育における読書指導を，滑川道夫(35)は，生活指導における読書指導，渡辺茂男(49)は学校国書館における読書指導について論じている。しかし，これらの諸分野を総合し読書指導とは何か，そのねらいやその固有性についての吟味なしにこの課題を解決することはできない。この点編集上に大きな問題があるといえるし，今後の課題として提起したい。そして，もはや常識論の時代ではなく，もっと理論的にも，方法論においても深化させることが急務であるといえる。それにつけても，「学校図書館」にこの一年間，すぐれた読書指導の理論や実践報告が無かったことにより大きな問題点を見いださずにはおられない。ただ，今村秀夫〔4〕が読書指導講座を連載し，ユニークな読書指導の実践的な論文はおもしろく読めた程度である。

「児童心理」では，阪本一郎(23)は，読書意欲の開発に対して心理学的な考察をしているのが目を引く。また，滑川道夫(36)の読書習慣の形成も力作としていってよいだろう。石井庄司（2），周郷博(28)，石黒修（3）等の論文に加えて，蓑手重則(45)は，批判的読書についての考察，合田修(17)，今村秀夫（5）の実践報告は近年にない好論文といえるのではないだろうか。それにしても，「本を読む子・読まない子」というテーマの選び方は問題のとらえ方があまりにも単純すぎていてわれわれに抵抗を感じさせる。

「実践国語」では，加部佐助(12)の読書感想文指導の実践をとりあげて問題提起としているにとどめている。しかし，一年間，定金恒次等の実践報告が誌面をかざっているが，国語科における読書指導の理論や実践は，まだ十分に活発なものとなっているとはいえないのではないだろうか。

---

* Educational studies on (2) reading guidance.

** MUROFUSHI, Takeshi (Asia University)

このほか，会田雄次[1]は，大学における読書指導の重要性を論じ，読書の標準コースの設定，思考集中訓練を強調している。大学論のはなやかな中にあって，読書指導の問題をとりあげた唯一のものであるばかりでなく，好論文である。

このように図書や雑誌に現われた一般的な傾向は，二三のものは別として，ほとんどが一般論であって，その理論的な深化・拡充や，実践の普及はこれからの課題であるといえる。そして，読書科学の確立の重要性をいまさらながら痛感するものである。

一般的研究

読書指導の研究面では，「読書科学」を中心として木村典子[14]，大神貞男[11]，清水正男[26]，寺本俊美[33]，渡辺正己[50]がある。それに桜井南小学校[25]，天下茶屋中学校[34]，藤森幸雄[40]宮古小学校[46]がある。木村典子[14]は，青年期における人生観の確立において読書の役割を，主として発達課題との関係で質問紙法によって調査した。そして，望ましい読書材のあり方とそのリストを発表している。小さな調査ではあるがユニークな研究として注目される。それはわれわれが読書指導を研究してゆくための基礎的な研究の一つであるからである。また渡辺正己[50]は，読書指導を行なう場合，教師の期待と子どもの受けとり方にズレがあるのではないかという仮説のもとに，「百まいのきもの」（岩波子どもの本）をとりあげて5年生を対象として人格尊重，親切，長所短所，友情，忍耐などの五つの性格標目を設定し，作品朗読したあとで調査したものだが，ズレはそんなに大きくなかったとしている。また，「貧乏な少年の話」と比較読み，重ね読みによってその指導に効果があると指摘している。これは，日本読書学会編の「読み物による性格形成」の適書目録を適用するための基礎的な研究の一つとして注目されるが，その方法論については再検討を必要とする。

また，清水正男[26]は，戦前の青年図書館員連盟の会報や機関誌「図書館研究」を中心に，読みの場としての図書館について考察をしたものである。昭和前期の図書館の発展を中心に読書の研究として貴重な研究であろう。このほか，寺本俊美[33]は，集団読書指導を，求める読書，考える読書，まとめる読書の三つの目標に，図書選択基準を設定して読み物を選定した実践記録を寄せている。

藤森喜雄[40]は，高校1年生178名の夏休み以降の読書状況と9月下旬の生活時間，家庭環境などに加え，知能検査と一学期の学習成績などを合わせて，生徒自身と家庭内に存在する不読の原因を究明したものである。そして，読書意欲・興味の不足，読書能力の不足，時間の合理的利用の努力の不足や家庭における読書に対する関心の不足など四つの点を指摘している。不読者層のこうした研究がさらに深化されることを期待するとともに，この小さな研究の意味を高く評価したい。

国語教育における読書指導

藤原宏[41]は，国語科における読書指導について，①「読むことの能力」――読解指導と，②読解指導から発展した読書指導であると論じている。そして，学校図書館における読書指導との相異は，指導目標にあると指摘している。この問題は，さきの倉沢[15]の論文と併せ読むと，国語教育における読書指導のあり方と実際の概要が理解されよう。しかし，それで十分にこの問題に解決が与えられたということはできない。今後の研究が望まれる。これに対して木村毅樹[13]は，これに加え読書指導を人間形成や文学教育，および長文を読みとる能力を養うことを加えて，国語科の教育課程を改善し，授業時間を増加，週一回の読書指導の時間を特設することを提案している。つまり，国語教育と文学教育との関係において読書指導を考えることが必要であろうとする。こうした問題について長沢昭治[32]は，文学教材の指導は，これまで内容を重視し形式を軽視している。読解指導と読書指導の二本立てとすることによって，その欠点を補うべきであると論じている。また，文学教育の立場に立つ渋谷清視[27]のように国語科を言語科と文学科

とに分離し，文学の読書指導を考えている論者もある。こうした国語教育における読書指導のあり方は，根本的に解明されなければならない。

岩手県の宮古小学校(46)は，総合的な読書能力の発達を促すために，読書力の診断テストの結果を分析し，教科書との関連を図り，国語科を基底とした読書指導体系を発表している。その指導内容は，読書指導と図書館利用指導とを一つの体系にまとめたものである。指導単元についての資料と指導の留意点をあげて指導の手がかりを与え，さらにその発展として学年別の推せん図書リストも用意されている。この種の研究としては充実したものである。

実践報告としては，松田正雄(44)は，授業の発展として個人—集団—個人の指導過程をとりあげている。すぐれた実践。また，定金恒次(19, 20, 21, 22)は，「実践国語」「学校図書館」に多くの実践報告を行なっている。特に，近代文学思潮における各思潮を代表する作家25人を精選して，組織的・計画的に読ませる方法などすぐれたものといえよう。

読書感想文の指導は，斎藤はるみ著「読書感想文の指導」(共文社・昭40)のすぐれた労作がある。大塩卓(8)，加部佐助(12)横山貞作(48)，野村由(37)などがあり，いずれも好論文である。実践の積み重ねが十分にうかがえる分野である。それも読書感想文コンクールの一つの産物といえよう。こうした点に問題を残さないようにしたいものである。

道徳指導における読書指導

「道徳の時間」が次第に充実してきつつある時，長年，読み物利用による道徳指導の研究をしてきた奈良県の桜井南小学校(25)は，大谷甚太郎校長を中心に，文学作品と伝記を断片的な読み物や，その指導の類型化を排して，1冊まるごとを与える指導の研究成果を発表している。文学作品を道徳の時間にとりいれるには，一徳目で代弁できる単一価値をねらうのではなく，総合的な価値——人間の生き方を学ばせることにのみ道徳指導があるとする労作である。読み物による道徳指導は，短編か長編かという二つの考え方があり，それぞれ論者によって賛否が分かれるところであるが，長編を読ませる方法として注目に価するものである。

大阪の天下茶屋中学校(34)は，読み物による道徳指導と専門読書指導とを統一的に関連をもたせることを意図したものである。これまでの学級読書会——集団読書指導と，読み物による道徳指導とを関連させた指導計画（関連表）を作成し，その指導を実験的に実践し効果をあげたものである。非常に意欲的な労作であるといえる。特に，集団読書指導としては，すぐれた研究の一つである。これを道徳指導からみると，桜井南小学校と同じように長編の読み物による指導によって「いかに生くべきか」を追求することを意図している点で期せずして一致しているといえよう。ともに読み物による道徳指導の貴重な研究といえよう。

読書療法

この分野において特筆すべきことは，阪本一郎・室伏武等(24)によって読書療法の手びき書が完成したことである。読書指導の分野における画期的な労作であるといってよいだろう。これは，理論と実際の方法とが概説され，それに内外の事例を付したばかりでなく，読書療法のための図書リストをかかげてその実際の指針としている点にある。こうした手びきをもとに，読書療法が普及することを願うものである。また，この分野の研究者である大神貞男(11)は，これまでの読書療法の理論や方法について発表している。

事例研究は，大神貞男(10)が，第3報告を「読書科学」に発表しているだけであり，もっと多くの研究が期待されている。大神の事例研究は，強姦・恐喝・窃盗などの重罪犯罪の18才の少年に対する事例である。そして，その方法として自己解釈技法及びそれぞれ準ずるような治療的質疑を導入し，洞察を深めようとしたこと。またY—Gテスト結果による治療過程の検討とロールシャッハ法による人格の治療変化を明らかにしようとしている。

使用した読み物としては，「にんじん」「仔鹿物語」「ヘレンケラー」「次郎物語」「野口英世」「家なき子」「夜明け朝あけ」「狭き門」などである。そして，この少年の非行化の原因が両親や同胞の家庭の愛情慾求不満にあったこと。自己の身体的欠陥に劣等感を覚え自暴自棄的に非行を重ねていたことなどを自覚し，それから立ち上りを示したこと。恋愛に対する正しい理解を得たことなど，2か月間の治療によってかなりの効果をあげている。

文　献

1 会田雄次　学生と読書　中央公論　83—3 '66—3 322—329

2 石井庄司　読書の教育的意義　児童心理　20—10 '66—10 15—22

3 石黒修　楽しい読書の指導　児童心理　20—10 '66—10 51—56

4 今村秀夫　子どもを見つめた読書指導　学校図書館　186 '66—4 51—54, 187 '66—5 51—54, 188 '66—6 45—48, 189 '66—7 48—51, 190 '66—8 45—48, 192 '66—10 48—51, 193 '66—11 48—51, 194 '66—12 48—51

5 今村秀夫　生活の中の読書指導　児童心理　20—10 '66—10 105—110

6 板倉聖宣　科学教育における読書指導　学校図書館　184 '66—2 27—32

7 大浦猛〔等〕学級担任教師の読書指導　文教書院　昭41 283

8 大塩卓　読書感想文指導の実践　実践国語　27—319 '66—6 22—26, '66—8 3—6

9 大塩卓　生活指導の中の読書指導　実践国語　27—326 '66—12臨 172—179

10 大神貞男　非行少年の読書療法による治療例　読書科学 9—3 '66—2 8—14

11 大神貞男　読書療法とその適用例　家庭裁判所月報　18—2 '66—2 33—80

12 加部佐助　中学生の心に映じた「ぼっちゃん」と「山椒太夫」　実践国語　27—315 '66—2 36—40, 27—316 '66—3 30—34

13 木村毅樹　読書指導の位置づけ　実践国語　27—326 '66—12臨 48—58

14 木村典子　人生観の確立と読書との関係に関する調査　読書科学　9—3 '66—2 22—28

15 倉沢栄吉　国語教育における読書指導　学校図書館　184 '66—2 15—20

16 合田修〔等〕　こどもと読書　中林出版（中林ホーム・ライブリー1）　昭41 223

17 合田修　授業の中の読書指導　児童心理　20—10 '66—10 100—104

18 子どもの本研究会　私たちの選んだ子どもの本　昭41

19 定金恒次　国語科における読書指導　学校図書館　183 '66—1 31—34

20 定金恒次　高校における読書指導の実践　185 '66—3 33—38

21 定金恒次　学校図書館活動としての読書観・読書法の指導 190 '66—8 42—44

22 定金恒次　古典による読書指導　実践国語　27—326 '66—12臨 186—191

23 阪本一郎　読書意欲の心理学　児童心理　20—10 '65—10 1—14

24 阪本一郎・室伏武　読書療法　明治図書　昭41 209

25 桜井南小学校（桜井市）　読書による道徳教育　昭41 161

26 清水正男　教育を支える「よみ」の場としての図書館　読書科学　9—3 '66—2 1—7

27 渋谷清視　文学教育における読書指導　学校図書館　184 '66—2 8—14

28 周郷博　読書意欲を育てるもの　児童心理　20—10 '66—10 38—44

29 杉山康彦　読書と人生——自主的読書のすすめ　三一書房 1966 199（高校生新書42）

30 関茂　青年と読書——独学と自立のすすめ　日本YMCA同盟出版部　1966 242（パイオニアシリーズ1）

31 瀬田貞二〔等〕　絵本と子ども　福音館　1966 249

32 長沢昭治　国語科における読書指導の内容と形式　学校図書館　184 '66—2 38—44

33 寺本俊美　集団読書指導の実践的考察　読書科学　9—3 '66—2 33—38

34 天下茶屋中学校（大阪市） 集団読書指導と道徳指導との関連 1966 66（大阪市教育委員会研究指定研究報告書）
35 滑川道夫 生活指導における読書指導 学校図書館 184 '66—2 21—26
36 滑川道夫 望ましい読書習慣の形成 児童心理 20—10 '66—10 23—30
37 野村由 読書感想文を書くことの意義 実践国語 27—315 '66—2 50—54
38 馬場園校 特殊学級における読書指導 学校図書館 185 '66—3 39—43
39 速水博司 読書感想文の書き方 学校図書館 183 '66—1 26—30
40 藤森喜雄 不読者層の読書環境 木曾西高等学校（長野県） 昭41 13（謄写）
41 藤原宏 国語科における読書指導 実践国語 27—324 '66—11 85—89, 27—325 '66—12 34—39
42 深川恒喜 子どもの発達段階に則した標準読み物について 児童心理 20—10 '66—10 118—123
43 福田康夫・鈴木喜代春 新しい読書指導—学校・家庭・地域ぐるみの活動—改訂版 1966 278
44 松田正雄 授業の発展として扱う読書指導 実践国語 27—326 '66—12臨 180—186
45 蓑手重則 考える読みの指導 児童心理 20—10 '66—10 45—50
46 宮古小学校（宮古市） 国語科を中心とした読書指導体系 昭41 113
47 矢崎源九郎・神宮輝夫 子供に読ませたい本 社会思想社 昭41 293（現代教養文庫589）
48 横山貞作 読書感想文の系列をどうおさえるか 実践国語 27—315 '66—2 46—49
49 渡辺茂男 学校図書館における読書指導 学校図書館 184 '66—2 33—37
50 渡辺正己 子どもは物語をどう受け取るか 読書科学 9—3 '66—2 29—32
51 Arbuthnot, M. H. *Developing Life Values Through Reading. Elementary English* 43—1 '66—1 10—16
52 Chambers, D. W. Storytelling; The Neglected Art, *Elementary English* 53—7 '66—11 715—719
53 Frazier, A. & Schaty, E. E. Teaching a Picture Book as Literature. *Elementary English* 43—1 '66—1 45—49
54 Petty, W. T. & Starkey, R. Oral Language and Personal and Social Development. *Elementary English* 43—4 '66—4 386—394
55 Wright, G. S. Some Readnig Guidance Techniques. *English Journal* 55—9 '66—12 1183—1190

社会学的研究*

東京都立教育研究所 古野有隣**

本稿は1965年中に実施され，もしくは結果が発表された読書に関する社会学的研究のあらましを紹介しようとするものである。読書の社会学的な研究といっても，真にその名に値するものはきわめて少ないのが実情のようである。したがって，ここでも読書に関する社会的調査の成果といったものに限られることを初めに断わっておきたい。

1 第19回読書世論調査

これは1947年いらい毎日新聞社によって行なわれているものであり，第19回が1965年9月に行なわれた。

①—1．対象について

全国3,400余の市区町村を，七大都市，その他の市，及び郡部に分け，人口数・地域性などから25に層化し，各層から人口比により無作為に調査市区町村，調査地点

* Sociological studies on reading

** FURUNO, Arichika (Tokyo Metropolitan Institute of Educational Research)

を選び出し，そこから16才以上の男女各23名を抽出した。地点数は297，対象者数は6,831名であった。回収率は73.9%である。

①—2．結果について

調査の内容は，読書率，よいと思った本，最近買った本，好きな著者，書籍購入の手がかり，いつも読む月刊誌・週刊誌・週刊誌を読む場所，書籍・雑誌代，マスコミに使う時間，などである。

読書率としては，全体では71.3%である。男女別では男70.3%，女72.3%と第1回いらい初めて女性のそれが男性を上回る結果が現われている。年令別では，書籍・雑誌とも若いものほどよく読んでいるが，特に女性の方にその傾向が強い。地域別では大都市ほどまた学歴別では高学歴ほど高い。職業別では男女とも最高は学生で，男では管理職；自由業，女では自営者，給料生活者がこれについで高い。

書籍だけの読書率は45.0%，雑誌は66.8%であった。男女別にみると書籍は男46.5%，女43.6%，雑誌は男64.5%，女69.1%である。年令別・職業別の傾向は総合読書率の場合と同じような傾向がみとめられる。

書籍にたいする一般の嗜好，選択について“よいと思った本”“最近買った本”及び付帯調査の書店調査で“よく売れた本”を聞いているが，そのいずれにおいてもベスト10に入っているのが，徳川家康・愛と死をみつめて・日本の歴史・おれについてこいの4書である。

好きな著者としてあげられた上位は次の諸作家である。夏目漱石，吉川英治，松本清張，石坂洋次郎，武者小路実篤，井上靖，川端康成，谷崎潤一郎，源氏鶏太，林芙美子。

書籍購入の手がかりとしてもっとも多く利用しているのは“書店で見て”である。この傾向は女よりは男に，また若いものほど強い。30代以後では“新聞・雑誌の書評や新刊紹介”が書店で見てよりも多くなっている。

いつも読む月刊誌としては，文芸春秋をトップに，以下，主婦之友，家の光，婦人倶楽部，主婦と生活，婦人生活，婦人公論，平凡，暮しの手帖，小説新潮がつづいている。女性用の月刊誌が上位に並んでいることからうかがえるように，男の方が女の2倍近くも多くの種類に分類しており，男女の差が大きい。

週刊誌については，女性自身，サンデー毎日，週刊朝日がよく読まれているものであり，平均1.1冊の週刊誌がいつも読まれ，読む場所としては，自宅が64%，職場16%，通勤途中11%の順である。

1か月に使う書籍代は560円，月刊誌代は270円，週刊誌代は160円が平均である。書籍・雑誌代が一番多いのは管理・自由業で，2位の事務・技術職の倍近くになっている。

2　第11回学校読書調査

毎日新聞社によって1954年いらい行なわれ，1963年からは全国学校図書館協議会に委託されているものである。

②—1．対象について

小・中学校は，全国の学校を14の類型に分け，それぞれの在籍生徒数に応じてサンプル校数を定め，高校は7つの学科ごとの在籍者数に応じてサンプル校数を定めた（校数は不明）

②—2．内容について

小学生の読んでいる雑誌には週刊のものが多く，中学生ではこども週刊誌と平凡・明星への集中がみられ，高校生では性別による傾向の差が顕著であることが目につく。

読まれている書籍では，日本や外国の名作が多く読まれ，小学校ではこれに伝記が加わり，中・高校ではベストセラーものが加わるのが実情である。

5月1カ月間に1冊も本を読まなかったのが小学生に10%，中学生に27.4%，高校生に29.4%いるが，その理由は，小学生では，遊んでいると本を読むひまがない，きらい，中・高校では，きらいがもっとも多く，勉強でひまがないがついでいる。

1日の読書時間をみると，0分（読まない）と15分以内という不読者層が小学生で49.1%，中学生で48.5%，

高校生でさえ38.2%もいる。

3　第21回全国農村読書調査

1946年いらい，家の光協会によって実施されてきているものであるが1966年8月に第21回の調査が実施され，同12月に報告書が刊行されている。（第20回の結果を，「読書科学第34号・年報1965年の読書界」に紹介してある）。

①　調査方法

前回のさいと変りがないので，かんたんに記すことにする。

対象の決定……全国の農業協同組合を10ブロックに分け，各ブロック内の組合を所在地による地帯区分ならびに規模別により50層に分ける。その各層から確率比例抽出法により1つの農協を抽出し，そこからあらかじめ割り当てられた世帯数に応じて各世帯から任意に1名を抽出し，計1,500名を対象とした。

調査の方法……質問紙による個別面接

実施及び回収……8月1ヵ月中の任意の4日間。回収率は92.2%であった。

②　調査結果の内容

調査の結果はつぎのようにまとめられている。

Ⅰ．雑誌――雑誌読書率，どんな雑誌が読まれているか，主要10雑誌の読者分析，属性別にみた読書の構成，雑誌を読む理由。

Ⅱ．書籍――書籍読書率，どんな書籍が読まれているか，書籍の入手経路，好きな作家・著述家。

Ⅲ．耐久消費財所有及び新聞購読状況

このうち，Ⅰ及びⅡは前回とまったく変りがなく，Ⅲは今回新たなものであり，前回あったテレビ・ラジオの視聴状況が今回は削られている。ここではⅢは省略して'Ⅰ及びⅡの結果について紹介することにしたい。

②―1．雑誌に関して

雑誌を“毎月（週）読む”“ときどき読む”“読まない”に分けると，それぞれ45%，35%，20%となっている。男女別では“毎月（週）読む”及び“ときどき読む”のは男性の比率が高く，“読まない”では女性の方が高いことから，全体として男性の方が雑誌をよく読んでいるようである。年令別では高年令層ほど読まないものが多い。また10代以外ではどの年代でも“毎月（週）読む”ものは男性の方が多い。職業別では給料生活者・学生・自由業その他，農林業・商工サービス業・水産漁業・労務者の順に“毎月（週）読む”ものの比率が低くなっている。学歴別では学歴の高い層ほどよく読んでいる。純農村地帯と都市近郊農村地帯に分けると，後者の方がよく読むという結果になっている。

毎月（週）読む雑誌としてあげられたものは月刊誌150誌，週刊誌30誌であるが，その上位各10誌はつぎのとうりである。

表1　雑誌読書率

		毎月(週)読む	ときどき読む	読まない
	合計	45.1	35.1	19.7
性別	男	48.8	33.3	18.0
	女	41.5	37.0	21.5
年令別	16～19	53.3	42.1	4.6
	20～29	55.8	36.8	7.4
	30～39	46.1	35.4	18.5
	40～49	37.8	34.8	27.4
	50～59	36.3	27.8	35.9
学歴別	小・高小	33.6	35.8	30.6
	新中	43.2	43.5	13.3
	旧中	63.3	25.2	11.6
	新高	63.3	34.5	2.2
	大学・旧高専	64.3	25.0	10.7
職業別	農林業	42.3	33.2	24.5
	水産漁業	33.3	44.4	22.2
	給料生活者	57.9	34.2	7.9
	労務者	15.0	42.5	42.5
	商工サービス業	37.9	31.6	30.5
	自由業	42.9	28.6	28.6
	学生	52.8	43.9	3.3
	無職	40.4	41.6	18.0
	その他	42.9	35.7	21.4
地帯別	純農村	43.5	34.5	22.0
	都市近郊	49.6	36.8	13.6

（月刊誌）家の光，平凡，主婦之友，地上，文芸春秋，明星，婦人倶楽部，婦人公論，主婦と生活，リーダース・ダイジェスト

（週刊誌）週刊朝日，サンデー毎日，女性自身，週刊読売，週刊新潮，週刊平凡，週刊明星，週刊文春，週刊サンケイ，ヤングレディ

雑誌を読む理由としては，月刊誌は“実用のため”（38.5%），“知識を広める”（37.4%），“新しい話題を知る”（34.5%）がおもなものであり，週刊誌は“娯楽として”（51.2%），“新しい話題を知る”（39.9%）“退くつしのぎ”（34.6%）のために読まれることが多くなっている。

入手方法としては，“毎月（週）読む”ものを買う場合は農協（54.0%），本屋(40.1%)が多く，“時々読む”ものを買う場合は本屋（54.7%）がほとんどであり，この場合には友人・知人から借りることもかなり多い。

②—2．書籍に関して

過去1年間に書籍（単行本）を1冊でも読んだものは26%，であった。これを属性別にみると，男性は27%，女性は25%であり，ほとんど差がない。年令別では10代—59%，20代—40%，30代—19%，40代—16%，50代—12%と，年代の上になるにつれて低下している。学歴別では小・高小—12%，新中—34%，旧中—29%，新高—49%，旧高専・大学—61%と学歴の高いものほどよく読んでいる。職業別では学生がもっとも高く，給料生活者，商工サービス業，その他，農業者の順になっている。また，地帯別としては，都市近郊の方が純農村地帯よりいくらか多く読んでいるようである。

1年間に読んだ冊数としては2～5冊が45%でもっとも多く，11冊以上が17%，6～10冊が16%とつづいている。1冊しか読まなかったのは12%である。

読んだ書籍としてあげられたものの上位は表2のごとくである。入手経路としては，書店で買う（56%）ことが多く，知人から借りる（26%），図書館・公民館で借りる（17%），場合もかなり多い。

好きな作家・著述家としては，40年に続いて石坂洋次郎がトップになっている。

表2　読まれた書籍

順位			
1.	氷　点	6.	徳川家康
2.	坊ちゃん	7.	愛と死をみつめて
3.	風と共に去りぬ	7.	赤と黒
4.	戦争と平和	7.	うず潮
5.	宮本武蔵	10.	暗夜行路
		10.	人間革命

表3　好きな作家・著述家

1.	石坂洋次郎	6.	井上　靖
2.	源氏鶏太	7.	林　芙美子
3.	夏目漱石	8.	川端康成
4.	吉川英治	9.	武者小路　実篤
5.	松本清張	9.	島崎藤村

4　こどもと読書

出版科学研究所（東販）によって，昭和33年いらい実施されている調査である。40年9月15日から2週間にわたって，その第6回調査がなされ，その成果が重点項目ごとの分冊パンフレットとして7冊まとめられている。（最初の4回は毎年行なわれ，以後は隔年になっている)。その No 1 と No2 はいずれも40年12月に発行されているが，前年の本誌には触れなかったので，ここでまとめて扱うことにする。

①　調査の方法

都内23区より小・中学各40校を無作為に抽出し，小学校は4年以上，中学校は全学年から1クラスを選び，そこから各10名を等間隔に抽出した。対象者の総数は小・中各1,200名及びその保護者で，計4,800名である。回収率は小—生徒95.5%，保護者93.0%，中—生徒88.1%，保護者85.0%であった。

②　調査結果の内容

各分冊ごとに結果のあらましをながめてみよう。

②—1．本はどの程度読まれているか

夏休み中にマンガ本も含めて1冊でも書籍を読んだ生徒は小学生89%，中学生90%であり，小・中とも，男子

より女子の読書率の方が高い。学年別では，小学生では6年，中学では1年がもっとも高く，中学では学年が上になるほど低くなる傾向がある。このうち，マンガ本の読書率は小学生16%，中学生7%であり，小・中を通じて学年が上になるにつれてマンガ本を読むことが少なくなるような傾向がみられる。

保護者の職業との関係をみると，書籍全体の読書率は小・中とも管理職や自由業の子が高いが，マンガ本では労務職や自営商工業の子どもが高いという結果があらわれている。

表4　保護者の職業と読書率

保護者の職業	小学生		中学生	
	書籍全体	マンガ本	書籍全体	マンガ本
自営商・工業	86	16	91	8
事務職	92	16	88	6
労務職	82	17	83	9
管理職	93	12	95	7
自由業	96	15	96	5

②—2．どんな本が読まれているか

マンガ本を除いた書籍を分類してみると，小・中学生とも文学が圧倒的に多い。（小—72%，中—81%），その他では，歴史・地理（小—17%，中—10%）自然科学（小—6%，中—4%）が多いくらいである。

よく読まれたものの上位はつぎのようなものである。

小学生—シートン動物記，若草物語，小公子，小公女，太閤記，海底2万マイル，次郎物語，十五少年漂流記，家なき子，ああ無情。

中学生—坊ちゃん，次郎物語，赤毛のアン，アンネの日記，路傍の石，二十四の瞳，若草物語，鼻，ビルマの竪琴。

上位20位までをとると，そのうち，小学生では15点が外国ものであり，中学生では半数ずつという傾向の差がみられている。

②—3．本との結びつき

子どもたちが読んだそれらの本をどのような動機から読む気になったのかをみると，小学生も中学生も“本の名前が面白そうだったから”というのがもっとも多くなっている。

家の人や先生・友だちからすすめられたというパーソナルインフルエンスによるもの，本の名前，テレビや映画の作品などを通して自主的に選んだもの，及び家の蔵書を利用したという3つに分けてみると，小学生では41%—34%—22%であり，中学生では36—38—19ということになる。

つぎに，それらを入手した方法としては，小学生では“家の人に買ってもらった”（33%），“家にあった”（23%），“図書館から借りた”（18%），が多いが，中学生では，“家にあった”（25%），“自分で買った”（25%），“図書館から借りた”（18%），“家の人から買ってもらった”（17%）と，当然のことながら，いくらかのちがいを示している。

②—4．雑誌はどの程度買われているか

夏休み中の雑誌の購読率は，小学生—月刊読は48%，週刊誌は71%，中学生—月刊誌47%，週刊誌は42%である。

小学生に多く買われた月刊誌は少年サンデー，少年マガジン，少女フレンド，マーガレット，少年キングの順で，男女のあいだに変りがない。月刊誌ではりぼん，少年，小学4年生，なかよし，小学5年生，4年の科学，4年の学習，6年の科学，小学6年生，少年画報が上位の10点になっている。

また，中学生ではよく買われた月刊誌は，中1時代，中1コース，中2コース，中3コース，中2時代，中3時代，少年，ボーイズライフ，明星，平凡の順にならんでいる。週刊誌としては，少年サンデー，少年マガジン，マーガレット，少女フレンド，少年キングであり，小学生と同じ名前がならんでいる。中学生では，学年が上になるにつれて，月刊の学年誌の占める比率が減少している。

②—5．雑誌の魅力

雑誌を買った動機としては，小・中学生とも，月刊誌でも，週刊誌でも継続して買っているからというのがも

っとも多い。

雑誌の好きな記事では，小学生の場合にはこっけいマンガが17%でもっとも多く，以下名作物語（11%），冒険・探偵小説，冒険・探偵マンガ，伝記物語，（各10%），スポーツ，戦争マンガ，忍者・ちゃんばらマンガ（各6%），の順になっている。大きく，物語，マンガ，その他の3つに分けてみると43%—38%—18%という割合になるが，これを男女別にすると，男子—37%—44%—18%，女子は51%—31%—19%であり，物語とマンガの位置が男女で逆転している。

また，中学生では，冒険・探偵小説が14%でもっとも多く，以下，こっけいマンガ（13%），名作物語（11%），青春物語，伝記物語，（各9%）とつづいている。全体としては，物語りが51%，マンガが29%，その他は21%であり，小学生にくらべて，物語がふえ，マンガが減っている。

②—6．こどもの生活と保護者

ここには休日の過し方，課外の習い事，テレビ番組の嗜好，テレビの影響，こどもの読書にたいする保護者の態度といった内容が含まれている。休日（具体的にこの前の日曜日）におもにしたこととして三つあげられたものの比率の中で読書が占めたのは小学生では10%で，第4位，中学生では12%で同じく4位である。

こどもの読書にたいする保護者の態度について，これを保護者の職業別にみると，良いものを積極的に買い与えているというのが自由業や管理業に多く，勉強のための参考書だけは買わせているとか，ほとんど買わせていないという無関心の態度は労務職に多く，親の職業によってかなりの差がみられる。

②—7．むすび

ここでは1〜6までに触れられなかったものとして，書籍・月刊誌・週刊誌に対する読書の相関性，保護者の出版物購読・非購読別に見たこどもの読書に対する態度及びこどもの出版物購読状況が記されている。

書籍・月刊誌・週刊誌の相関関係としては，書籍との接触度の高い生徒ほど月刊誌も週刊誌もよく買っているという関係が小学生でも中学生でも見られるが，特に月刊誌の場合にその傾向がいちじるしい。

保護者を出版物の購読者と非購読者に分けてみると，子どもの読書に対する態度の面では，勉強のための参考書だけは買わせるとか，ほとんど買わせないといった読書に対して関心の薄い態度は非購読者の方が多く，とくに悪いと思ったもの以外は自由に買わせているとか，良いと思う本や雑誌を積極的に買い与えているという積極的な読書指導的な態度は購読者の方が多くなっている。

また，子どもの書籍との接触状況の面でも，購読者の子どもの方が書籍を読むことでも，買うことでも非購読者の子どもより多い。

5　読書社会調査問題別レポート

これは朝日新聞社によって行なわれた第7回読書社会調査（その内容は1965年報に紹介した）をいろいろな角度から分析したもので，1966年次にはそのNo5からNo10までの6分冊が発行されている。ここではその6分冊の内容を紹介する。

④—1．小説の購読者

小売書店の店頭で小説を買った人のうち6割が男性で，女性は4割である。⅔は24才以下の人が占めているが，男性の⅓は20代前半で，女性では⅔近くがハイティーンである。

学歴では，男性では大学生と大学卒の人が半分以上だが，女性の場合は半分以上が高校生と高校出のBGになっている。また，職業をみると，学生が約半分を占め，あとは男女とも，勤人が3割近くいる。

これらのことから，小説を買っているのは男子大学生，女子高校生，若いサラリーマン，若いBGなどといえそうである。

買った小説を日本の小説，外国の小説に分けると，日本の小説を買った人は男性—65%，女性—35%で，外国小説は男性—56%，女性—44%であり，女性の場合にやや外国小説への傾きが大きいようである。

④—2．出版者と読者

読書社会調査の対象となった書籍・雑誌の出版社の中から，比較の対象として興味があり，ある程度以上のサンプル数を有するという条件により撰択された12社について，それぞれの読者の比較をしたものである。

男性の購入者が多い出版社と女性購入者の多い出版者があるが，前者は文芸春秋新社，岩波書店，後者には平凡出版，小学館，主婦之友社などである。

年令的には，10代の購入者が多いのは平凡出版，集英社，20代の購入者が多いのは河出書房新社，光文社，岩波書店，中央公論社，講談社，30才以上の人が多いのは主婦之友社，文芸春秋新社などである。

学歴の面では，低学歴の人は平凡出版，中学歴の人は集英社，小学館，主婦之友社，高学歴の人は岩波書店，文芸春秋新社の出版物をそれぞれよく買っている。

職業との関係をみると，サラリーマンの購入者が多いのは光文社，中央公論社，文芸春秋新社，講談社，労務職では平凡出版，集英社，主婦が多いのは主婦之友社，また，学生が多いのは岩波書店，角川書店，河出書房新社となっている。

④—3．本の買い手が読む週刊誌

男性講読者の占める割合が圧倒的に多い週刊誌は朝日ジャーナル，女性購読者の占める割合が圧倒的に多いのは女性自身である。この女性自身と女性がやや多い週刊平凡以外の週刊誌はいずれも男性の方が女性より多い。（ただしここでとりあげられたのはすべての週刊誌ではない。）

10代の購読者が約半数を占めるのは週刊平凡，20代の購読者が半数以上を占めるのは朝日ジャーナル，週刊新潮，週刊文春，30代以上の購読者が他にくらべて多いのは週刊文春，週刊朝日，週刊新潮となっている。

学歴では，朝日ジャーナル，週刊朝日，週刊文春，週刊新潮は大学出の人が半数以上を占め，女性自身，週刊平凡は高校出の人が半数以上を占めている。

職業の面では，勤人の占める割合の多いのは週刊文春，週刊新潮，サンデー毎日，週刊朝日があり，労務職では週刊平凡，主婦などでは女性自身，学生の多いのは朝日ジャーナルと週刊平凡である。

④—4．雑誌の種類別読者及び双書の購入者

雑誌の種類別にその購入者の性格をみると，

総合雑誌——ほとんどが男性で，20代・30代の人が中心。高学歴層が⅔を占め，半分近くが勤人である。

婦人雑誌——ほとんどが女性で，20代・30代を中心に老若にわたっている。また，過半数は高校程度の学歴の人になっている。

娯楽雑誌——⅔が女性で，その半数近くは中学程度の人で，年令は10代，学生が4割。

映画雑誌——女性がほとんど全部で，10代が6割を占める。5割が高校卒で，6割が学生。

服飾雑誌——全部女性。年令は若い人のみとは限らない。⅔が高校卒で，主婦が⅓いる。

ラジオ・テレビのテキストもの——男女が同じくらい。10代を中心に40代にまでわたっている。高校程度と大学程度が半々で，学生が4割を占めている。

また，双書の購入者の特性は次のようになっている。

岩波文庫—男女比が2：1。24才以下が8割。大学程度の学歴の人，学生がいずれも¾。

岩波新書—男女比は4：1。大半が24才以下。¾が大学卒で，学生が6割。

角川文庫—男女比が5：4。約8割が24才以下。高校程度が4割で，学生が6割。

カッパブックス—男女比は4：1。若年層は⅓くらい。高校程度が約半数，勤人が半数近く。

新潮文庫—男女比が5：4。若年層が¾。高校程度と大学程度が半々くらいで，学生が過半数を占める。

④—5．書店所在地の特性

東京の小売書店を住宅街と商店街の別，及び神田・オフィス街・盛り場・大学生協の別という面から，図書の購入状況を見たもの。

書籍・雑誌とも，文学部門のものは住宅街の書店の方が購入される率が高い。また，総合雑誌は商店街の書店の方が多い。大学生協では，総記・哲学・社会科学，神田では社会科学・自然科学・工学部門，オフィス街や盛

り場の書店では文学部門が購入される比率が高くなっている。

購入者の性別では，住宅街の書店では男女がほぼ半々であるが，商店街では7：3で男性が多い。また，大学生協・神田では8割以上が男性である。

④―6．文学書・専門書・実用書の分析

文学書及び専門書は約6割が双書形式で発行され，実用書では約7割が単行書形式で，双書形式は3割以下になっている。定価の点では，文学書及び実用書は約7割が300円以下であるが，専門書は501円以上が半数近くを占めている。

それぞれの購入者の特性はつぎのようである。

男女の別では，専門書は9割，実用書は7割文学書も6割と男性が多く購入している。

学歴では，文学書と実用書はいずれも，初等学歴層の1割，中等学歴層，高等学歴層高等学歴層がともに4割であるが，専門書では高等学歴層が7割にもなっている。

職業の点では，文学書と専門書が同じような傾向を示し，8割が学生か勤人である。実用書の場合も勤人・学生が多いことは同じだが，比率はそれほど高くない。

心理学的研究*

東京教育大学　佐藤泰正

読書能力

福沢周亮ら（注1）は読書力のない児童の分析と題して研究を行なった。小学3年生と5年生，計287名を対象に読書力検査，知能検査，学習興味診断検査，家庭環境診断検査，語い調査，連想語調査を行ない，いろいろ分析を行なったが，そのなかで読書力のない児童10名と読書力のある児童10名をえらんで調べている。これは知能偏差値と読書力偏差値の差を問題にし，知能より読書力の高い方から10人，読書力より知能が高い方から10人選んでいる。その結果，両者の間に知能には差がない。当然のことだが読書力及び読書力の下位検査のすべて，語い調査においても読書力の高いものがよかった。読書力のない児童は部屋に余有がなかったり，本がなかったりで，めぐまれた家庭環境にいるものは少ない。

佐藤泰正（注2）は盲児の点字触読の発達的研究を行なった。全国の盲学校の小学1年から中学3年までの児童生徒5329名を対象に点字触読力検査を行い，読みの発達についてのべている。主として読みの速度を調べたが，結果をまとめると，盲児の場合も，学年が進むにつれて（ここでは小学部1年から盲学校に入学したものだけであるから）点字学習期間も増し，点字読みの速度は速くなる。小学1年から4年までの進歩はいちじるしい。とくに，大きくのびるのは小学3年～小学4年，中学1年～中学2年の間であった。正確率は小1，小2，小3と増して行くが，小3になると90%台となり正確に読もうとする態度ができてくる。男女差は各学年ともみられない。正眼者（目の普通にみえる人）が普通の文字を読む速さに比較すると，盲児の点字読みの速度はおそい。小1は著るしく遅れている。小3以降，大体3～4倍弱の時間がかかる。

岡田明（注3）は速読の訓練が読書力の向上と，読みのフレキシビリティにどのような影響をあたえるかを調べた。速読の前後にテストを行い，速読訓練用として3冊の本を選び，1週2回づつ8週間にわたって15回行なった。結果は，訓練を受けたものが読速度とフレキシビリティの両方に好ましい影響を与えている。被験者は各1名づつである。

* Psychological studies on reading

** SATO, Yasumasa (Tokyo Univ. of Education)

読書力検査

村石昭三・佐藤泰正（注4）は読書力診断検査（中学校用）を作成したが，これは昨年度作成された小学校用とほとんど同様の構成からなっている。すなわち，本検査では，読速・読字・読解とわかれ，読解は主題・あらすじ・要点のほかに，読書材料別の読解力を調べることも試み，文学文・科学文・論説文の読解力が評価できるようになっている。

佐藤泰正（注5）は盲人用の点字触読力検査を作成した。点字読みの速さと正確度が求められ，速さから，偏差値が得られるようになっている。

読書興味

阪本一郎（注6）は都内の小学校4～5～6年生，各2組づつ計518名を対象に質問紙法を用いて，漫画への接近状況，ロボット漫画の魅力，忍者漫画の魅力など最近の児童マンガと子供の関係について調査した。結果は子供の90%は1カ月に何か漫画を読んでいて，その大半がおもしろいといえるものにであっている。子供に好まれる漫画の種類は性差・年令差・地域差がみられるが，男子は空想科学ものに，女子は悲哀ものに圧倒的に興味をもつこと，両性に共通するものはユーモアであった。空想科学ものは広義のアクションものの変形である。アクションものの今日の花形は未来形式のロボットものと時代形式の忍者ものとがあり，前者は男女とも好まれるが，後者は女子には迎えられていないなどの結果を報じている。

読書とパーソナリティ・読書療法

木村典子（注7）は青年期の人生観の確立に読書がどのような影響をあたえるかを調べた。高校1年から3年までの生徒717名を対象に調べた。その結果，人生観確立の主な要素として友人・家庭と並んで書物の影響もかなり大きいことをのべ，高校生の人生観確立のための望ましい読書材のあり方に言及している。

大神貞男（注8）は非行少年の読書療法の治療例を報告している。すなわち，強姦・恐喝窃盗等の重罪犯罪少年に読書療法を施し，治療効果をのべている。本症例は①家庭の愛情欲求の阻止，②身体的欠陥に基づく劣等感，③これらを心因とする青年期の代償的性的非行行動という解釈を行なった。治療読物として，①に関するものとして，にんじん・仔鹿物語・家なき子・夜あけ朝あけ，②に関するものとして，ヘレンケラー・野口英世，③に関するものとして，狭き門などをあたえ，治療期間は70日間，その間に面接を11回行なっている。結果は少年が態度を変えたこと，治療効果があったことが報告された。

読書療法の実践と研究のための手引きとして，阪本一郎ら（注9）による「読書療法」が刊行された。この本は，第1章「読書療法への道」では，読書療法の発達の経緯を展望し，第2章「問題児の読書療法の心理的基礎」では，実際に治療指導にあたるものが，診断から読み物の処方を経て治療に当るまでの過程でわきまえていなければならぬ心理学の情報を概説し，第3章「読書療法の方法」では，治療指導の実際にあたって用いられる技術とその意義を解説し，さらに第4章「読書療法の事例」では，この療法による内外の治療例を示して治療の実際における治療者の判断に資するように構成されている。

読み易さ

市原洋右（注10）は数字の読み易さに関する研究を行なった。すなわち，数字の形・大きさ・太さの条件が読み易さに与える条件を調べ，さらに，図と地を白黒反転させた場合も同様の傾向があるかを調べた。タキストスコープを使用し，認知閾を調べた。材料は1から0までの10個の数字で高さは9.5mm，5.5mm，3.5mmの3種類の白地黒数字と，5.5mmの黒字白数字の1種類，数字の高さに対する太さの割合を25%，20%，13%，6%の4種類にした。被験者は大学生6名で5回づつみせて，平均値を求めた。結果は①数字間の相対的読み易さの順序は太さの条件によって多少異なる。すなわち，太

くなるほど直線的な数字（4.1など）は相対的に読み易い。丸みのある数字（0，6，9）は読みにくくなる。②数字間の読み易さの順序は大きさの条件によって多少異なる。小さくなるほど直線的な数字は読み易くなり，丸みのある数字は読みにくくなる。③10個の数字はそれぞれ小さくなるにしたがってⒶ数字7は常に読みやすい。Ⓑ数字1.4は中位の読みやすさから読みやすい方へ移る。Ⓒ数字2，3，5はほぼ中位の読みやすさにとどまる。Ⓓ数字0は読みやすい方から中位の読みやすさに移行する。Ⓔ数字6,9は中位の読みやすさから下位へ移る。Ⓕ数字8はつねに読みにくい。④全体として形の構造が単純な数字は複雑な構造の数字よりも読みやすい。⑤図地関係を反転させ，黒地に白数字のばあいも，数字読みやすさと，数字の形・太さとの関係は白地に黒の場合と同様の傾向がある。

阪本敬彦（注11）は，B5版横組み印刷物の読みやすさについての実験的研究を行なった。実験条件としては，活字の大きさ・組み方・行間をとりあげた。すなわち，活字の大きさ（8ポ，9ポ），組み方（2段組，3段組），行間（4ポ，5ポ）の条件を組みあわせた8通りの印刷様式で同じ速読テストを印刷して用いた。被験者は大学生400人で，共通テストでの読字数が平均±1標準偏差以内の者についてのみ分析している。各印刷様式別の1分間の平均読字数を比較している。

速読テストの結果はE型（活字9ポ，2段組，行間5ポ）が一番よく，1分間593字，次いでA型（活字8ポ，2段組，行間5ポ），一番悪かったのはH型（活字9ポ，3段組，行間4ポ）で，1分間546字であった。この結果を，とりあげた条件別に分析すると，①活字の大きさは必ずしも大きい方がよいとはいえない。大きい活字（9ポ）を用いる時は，2段組にして十分な行間をとらなければならない，②組み方では，3段組のものより，2段組のものの方が圧倒的に成績がよい，③行間は段組と密接な関係があり，2段組の時は広い方（5ポ）がよいが，3段組の場合はむしろせまい方（4ポ）がよい，の3点が明らかとなった。さらに，この3条件の中で段組の影響が圧倒的に大きかった理由として，2段組では，1行の字数が22～25字なのに対して3段組では，14～16字となるために，印／刷物のように，単語が行の変わり目で切れている単語切れや，“30歳前後／の”といった句の途中に切れ目のきてしまう句切れの数がずっと多いために，読みの速さがさまたげられることをあげている。

漢字の読み

河井芳文（注12）は，漢字の読みの難易を，その使用頻度と複雑さとの関係において研究した。漢字の読みは，単純な字の方がやさしいように考えられがちであるが，それは単純な字の方が使用頻度の高いものが多いために，使用頻度の影響でそうなっているのであって，使用頻度を一定にして考えれば必ずしも単純な字の方がやさしいとはいえない。情報理論的にいえば，複雑な字の方が手がかりを多く持っているので読みは容易になるはずである。以上の仮定にもとずいて，次のような研究を行なった。①漢字の物理的複雑さと使用頻度との関係―漢字の物理的複雑さを，独立した線分，支点，接点等でわけられる線分，点などの部分の数（C）で定義し，（Cと画数の相関，$r=0.93$），「現代雑誌九十種の用語用字：漢字表」の中からランダムに50字とり出して，その使用頻度の順位と複雑性（C）との関係を調べた。漢字の複雑性（C）と使用頻度順位の対数（X）とは，$C=7.3\log X+0.1$ の関係がある。このことから，使用頻度の高い漢字は単純で，使用頻度の低い漢字は複雑である傾向があり，かつ，漢字の物理的複雑性とその使用頻度順位の対数との間には近似的直線関係が存在するといえる。②漢字の使用頻度と複雑性が読みにどのように影響しているかの検討―漢字の使用頻度表で使用頻度順位800以上の字の中から，200ずつ区切った使用頻度順位の段階ごとに大体等しくなるように，単純な漢字（$C\leqq 15$）計100字，複雑な漢字（$C\geqq 30$）計100をえらび，各の字の読み（音，訓，意味等）をテストした。被験者は，短大生および一般成人80名。使用頻度順位段階ごとの誤

反応数をみると，(a)使用頻度順位の高い方が誤りが少なく，(b)各段階においては，単純な字の方が複雑な字よりも誤反応が多かった。((a)(b)とも分散分析において有意）以上のことから，使用頻度は漢字の読みに影響し，かつ，使用頻度が一定の時には，漢字は複雑な方が読みが容易となるといえる。すなわち，前述の設定は支持された。

注及参考文献

1 福沢周亮，他 "読書力のない児童の分析" 研究紀要第3集，1966. 栃木県教育研究所

2 佐藤泰正 "盲児・弱視児の研究——点字触読力に影響する要因——" 日心30回大会 昭41.

3 岡田 明 "読書力訓練の reading rate ならびにその flexibility に及ぼす影響について" 日心30回大会 昭41.

4 村石昭三・佐藤泰正 "読書力診断検査中学校用" 日本文化科学社 1966

佐藤泰正 "点字触読力検査" 東京教育大学特殊教育研究室 1966

5 佐藤泰正 "盲児の点字触読に関する発達的研究" 読書科学9巻3号 1966. 2月

6 阪本一郎 "最近の児童漫画と子ども(Ⅱ)" 読書科学9巻3号 昭41年2月

7 木村典子 "高校生の人生観の確立と読書との関係" 読書科学9巻3号. 1966.

8 大神貞男 "重罪犯罪少年の読書療法に関する治療例" 昭41. 2 読書科学9巻3号通巻33号

9 阪本一郎他編 「読書療法」明治図書. 昭41. 9.

10 市原洋右 "数字の読み易さに関する研究" ——数字の形，太さ，大きさの条件の効果——日心30回大会 昭41.

11 阪本敬彦 "読みやすい横組印刷とは" 科学朝日 26巻3号 昭41. 3.

12 河井芳文 "漢字の物理的複雑性と読みの学習" 教育心理学研究，14巻3号 昭41. 9.

16 阪本敬彦 "読書問題児の心理と指導" 児童心理，20巻10号，昭41. 10.

17 鴻巣良雄 "本を読みすぎる子の指導" 児童心理 20巻10号，昭41年10月.

18 杉浦成正 "マンガしか読まない子" 児童心理 20巻10号 昭41. 10.

19 大熊喜代松 "本を読まない子の指導" 児童心理 20巻10号，昭41. 10.

20 佐藤 毅 "現代社会における読書法" 児童心理 20巻10号，昭41. 10.

21 合田 修 "授業中の読書指導" 児童心理 20巻10号. 昭41. 10.

22 今村秀夫 "生活の中の読書指導" 児童心理 20巻10号，昭41. 10.

23 高田 亘 "主体的読解学習の実践" 児童心理 20巻2号 昭41. 2.

24 斉藤はるみ "読書感想文の指導" 児童心理 20巻6号，昭41. 6.

25 室伏 武 "マスコミ時代の読書" 児童心理 20巻8号，昭41. 8.

26 阪本一郎 "国際読書学会に出席して" 児童心理 20巻11号，昭41. 11.

27 阪本一郎 "読書意欲の心理学" 児童心理 20巻10号，昭41. 10.

28 滑川道夫 "望ましい読書習慣の形成" 児童心理 20巻10号，昭41. 10.

29 村石昭三 "幼児絵本とことばの心理" 児童心理 20巻10号，昭41. 10.

30 周郷 博 "読書意欲を育てるもの" 児童心理 20巻10号 昭41. 10.

31 蓑手重則 "考える読みの指導" 児童心理 20巻10号，昭41. 10.

32 椋鳩十 "本を読まない子の家庭教育" 児童心理 20巻10号，昭41. 10.

33 山室 静 "読書指導の基本" 児童心理 20巻10号，昭41 10.

34 深川恒喜 "子供の発達段階に即した標準読物について" 児童心理 20巻10号，昭41. 10.

35 岡本圭六 "読書困難児の診断と指導" 児童心理 20巻10号，昭41. 10.

GENERAL SUMMARY

In the studies on reading in 1966, Such trends as the following were notable.

A. Reading Instruction :

The disagreement on methods of teaching reading comprehension was as strong as it was last year, but the accent was on comparative study by way of practical teaching rather than on theoretical argument. According to many reports, viewpoints on the teaching process were divided roughly into two classes : "single reading synthesism" and "the three steps system." A conclusion has not been attained as yet.

Single reading synthesism insists that it is unnecessary to read through the material at first. This idea was the result of analyzing differences of opinion about what actually determined the teaching process: Does the sentence itself determine the teaching process? Or, is it the pupil as a reader? Or, is it the interaction of both? However, another problem was that, for literary material and for descriptive material, the teaching process might be different.

While "the basic teaching process" school argued that there is only one fundamental teaching process regardless of the subject, and it must be followed. A total of 77 reports covering all viewpoints were published.

B. Reading Guidance :

There was great progress in the educational field of reading, both in theory and in practice, last yesr. In our country, there had been a strict distinction between the sphere of study on reading comprehension, including the teaching of basic reading skills, and the sphere of extra-curricular reading guidance. But, there was some discussion on the essential relation of these, which showed a tendency toward the integration of both into the currecular reading instruction. Some magazines, i. e. "School Library" "Child Psychology", and "Practical Reading", included special articles on these problem, among which important opinions and experimental reports appeared.

Also, not a few reports on practical comprehensive plans and evaluations of the reading guidance program which aims at moral education were publisbed by primary and secondary schools. These were quite noteworthy.

Handy guide books on reading guidance for teachers and parents were printed. Some of them included useful bibliographies but as yet a complete bibliography has not been published.

For the advance of bibliotherapy, the J. S. S. R. published the first guide book in Japan. With its appearance case studies have become more active in general.

C. Sociological Survey :

Five reading surveys were taken.

1. A survey on the adult population which has been taken annually by the Mainichi Press since 1947. This year about 7,000 men and women above 16 years of age were checked as a cross section of the nation. Data was compiled on % of readers in the population; their favorite books and authors; their motives in buying books and magazines and total purchased; and time spent on the receiving end of society's mass-communication media.

2. A survey of youngsters : This has been carried out by the Mainichi Press since 1954. Data was on the reading tendencies of boys and girls from primary school through high school, the reasons why non-readres had never read, the time spent on reading each day, etc.

3. A survey of rural areas : This has taken by the Ienohikari Association since 1944. Data was on the ratio of those who read books, magazines, and newspapers to those who did not read, titles of the books most read ; the means of acquisition, etc.

4. A survey of pupils in Tokyo : This has been taken by the Institute for the Study of Publication, Tōhan, every other year since 1958. Data was almost the same as that of (2).

5. A survey of bookstore customers : This has been taken by the Asahi Press since 1954. Information was gathered on the popularity of certain novels, the type of customers relative to publishers, etc.

D. Psychological Studies :

Several studies were concerning reading abilities. S. Fukuzawa analzed tha traits of poor readers, and found that their intelligence was not always lower than that of good readers. Y. Satō studied the development of Braille reading by blind children. Remarkable progress was seen in grades 1 to 4, but their pace was 3 or 4 times slower than those who could see. A. Okada experimentally proved that speed reading trainning given twice a week for eight weeks greatly enhanced the reader's speed and flexibility.

A reading test for middle school students was made by S. Muraishi and Y. Satō. Another test for Braille reading of the blind was standardized by Y. Satō.

I. Sakamoto, surveying pupil's interest in recent magazine comics, reported that it was different depending on age, sex, and locality.

N. Kimura related that reading during adolescence strongly influences the formation of people's views of life. S. Okami's report was about the process of bibliotherapy which he successfully used in treating a juvenile delinquent who had committed rape and blackmail. I. Sakamoto and T. Murofushi wrote "Bibliotherapy", as a guide book for counceling teachers. T. Sakamoto studied the size and spacing of type relative to readability. Studies on the readable conditions of numerals, by H. Ishihara, and of Chinese characters, by Y. Kawai, were also made.

出版界の展望

一般図書の出版概況*

東販出版科学研究所　河　北　憲　夫**

東京オリンピックを背景として週刊誌は長い低迷期から脱し反撥に転じた。そしてこれを契機に出版物は書籍，月刊誌，週刊誌と全面に亘って普及を高めることとなった。41年もその趨勢に変りはなく，普及のうねりはむしろ近年に見られないような盛り上りを示した。すなわち部数面からの対前年比は書籍21%増，月刊誌8%増，週刊誌14%増，これらを定価に換算した総売上で見ると2,480億円と推定され，前年に対し21%の増収である。

ではこのような推移の中で具体的に出版活動はどのように展開されたか。書籍と雑誌に分けて述べてみたい。

書　籍

まず出版スタイルの面から興味ある傾向を取りあげてみよう。年々普及に普及を重ねてきた書籍が41年にもなお活況を呈したのは何といっても全集物の好調に負うところが大きい。事実，内外各種の文学全集を初めとして百科事典・思想・歴史・美術・音楽ものから経済・工学・理学などの専門分野まで企画は広範に亘り，またその売行も従来の水準を上廻った。全集物は37年頃から上昇気流に乗り，その後尻上りに売行を高めて更に41年の活況につながったわけだが，こうした現象は出版市場の変革を抜きにしては考えられない。それを端的に示すのが購買層の大膨脹である。経済的余裕の増大はもとよりとして子弟に対する教育熱，ひいては教育水準の上昇による中核的読書人口の増加，次第に好転する住宅事情とそれに伴う文化的調度品としての全集物に対する嗜好，世帯数の増加による全集購読単位の拡大，趣味の多様化と個性化にもとづく1人1全集的な風潮などが全集人口膨脹の要因として働いてきたが，これらの条件が41年になって一段と強められたことは明らかである。勿論一方で全集自体の魅力も見逃せないが，何れにしても全集物の好調が41年の書籍出版にとって有力な軸となったことは疑いのないところだ。

次に全集物と並んで大きな分野を占める各種の新書類，つまりペーパーバックスを見ると41年も多くのベストセラー作品がこの分野から生れたことは事実である。然しそれにしても2～3年来，40に余る出版社が戦列に参加しているだけに過剰生産の徴候は前年でも既に強かった。その上シリーズ物という条件もあって出版企画のマンネリ化，或いは競合という事態が重なり売行は前年に続いて鈍化した。勿論ペーパーバックスの主な顧客であるサラリーマンや大学生は増加しており，またその出版企画で最も成功の確率が高いノンフィクションへの読者の嗜好も年々高まっている。したがってペーパーバックスに対する背景はむしろ好転しつつあるというのが実情だ。それだけに41年の不調は注目される必要があろう。

ところが同様にシリーズスタイルでも文庫本の売行は好調を続けた。例えば数年来大きく伸びてきた歴史物の売行にも示されているが，最近の読者にはいわば源流にさかのぼる意識が強い。これは当然，古典や名作にもつながるわけで，好みの作品を自由に選択できる文庫が読者にアピールするのは自然の成行といえよう。なお文庫本で触れておきたいのは，ここでもやはりノンフィクシ

---

* Scope of the general publishing world.

** KAWAKITA, Norio (Institute for the Study of Publication, Tōhan.)

ョンのウェイトが上っていることだ。ノンフィクションについてはさきにペーパーバックスでも触れたが，ただ考えておきたいのは同じノンフィクションでも両者の間にはオーソドクシーの点で大きな相違があることだ。その点で復古の風潮がよみがえりつつある今日だけに，この辺にも文庫本とペーパーバックスの秘かな競合のあることが指摘されよう。

ところで次に低定価の文庫本とは対照的な高定価本を取りあげておきたい。一応定価2,000円以上のものを高定価本として，その売行は前年を大巾に上廻った。前年も相当伸びているだけに普及増はまさに根強い。それというのも美術関係を中心とする高定価本にはこれまでいろいろ挙げてきた好ましい市場要因が反映するからだ。勿論，部数自体は高定価本だけに自づから限定されるが，この種のものに対する需要が大きく伸びたことは十分注目されてよい。

大体以上が出版スタイルの面から見た興味ある動きだが，次に部門別の角度から主な傾向を述べてみよう。

総記部門

既に前年から異数の売行を示した“世界原色百科事典”，それに“現代新百科事典”“世界大百科事典”などの事典物のほか，新しく創刊されて好調なスタートを切った“世界の名著”，或いは着実な売行を辿る“人生の本”“現代ノンフィクション全集”というように全集分野が活発に動いたことが大きい。然しその一方では単行本もかなり好調で，前年から売れ続いた“人間の建設”や“鏡の中の世界”も含めて“若さに贈る”“春の草”“月影”“小林秀雄対話集”などの人生随想物，またそれとコントラストをなしている“へんな本”“立ち読み厳禁の本”“びっくり本”といったプレイボーイ物がよく出た。

哲学部門

総記と共に最近脚光を浴びつつある分野だが，41年には“西洋占星術”“生きがいの探求”“私をささえた一言”を初め，“人間の心得”“思想の花びら”“現代青春論”“忘れる技術”“内攻的性格”“肉食の思想”“道をひらく”など，主として人生論的なムードを捉えたものがよく売れた。なお全集物としては“三木清全集”の着実な売行を挙げておこう。

宗教部門

創価学会や立正佼成会といった宗団の隆昌を背景に宗教人の筆になる作品が広く読まれた。既に前年からベストセラーとなった“人間革命”が更に6カ月のロングランとなったほか，“人間への復帰”もそれに次いで売れた。ともかく41年の宗教部門は圧倒的にこの2作品で代表されたといっても過言ではない。

歴史部門

まず全集“日本の歴史”が注目されよう。前年2月に創刊されて各巻非常な売行となったが，41年も年間を通じて全集ベストセラーズの2位を確保した。全集ではそのほか“ライフ人間世界史”“日本の女性史”或いは“近代の戦争”が挙げられよう。また単行本では“海軍主計大尉小泉信吉”“歴史よもやま話”“天皇ヒロヒト”といったユニークな作品がベストセラーズの上位に進出したのを初め，アカデミックな“世界史概観”“日本の歴史”(岩波版)，戦記“太平洋戦争”“朝鮮戦争”“日露戦争”，伝記“福沢諭吉”“米内光政”“太平洋の提督”その他“風俗の歴史”或いはケネディ関係のものもそれなりに売れた。なお明治100年を記念する作品が相次いで出されたのもこの年の特徴であろう。

地理部門

一風変った旅行物として“ヨーロッパケチョンケチョン”が人気を集めると同時に，一方ではカッパの新企画というイメージで“今日の風土記シリーズ”（東京，京都，奈良）が伸びた。それだけ通り一辺の旅物では通用しなくなったわけだが，こうした傾向はカラー版“山の花”や“日本の山々”の売行にも示されている。なお全集物としては前年から売れている“日本の旅”が挙げられよう。

経済部門

41年も経営関係のものがよく出た。唯，従来と違う点は経営手法的なものより財閥や個々の企業を覗き見る趣

向がクローズアップされたことだ。“三菱紳士”“住友商人”“HONDA商法”“関西商法”或いは“東芝の悲劇”といった作品がそれである。また“学歴無用論”が世論を喚起して4カ月に亘りベストセラーズの上位にランクされたことも興味をひいた。然しそうした一方で“サムエルソンの経済学”や“資本論の世界”，全集物では“経済学全集”がそれなりの売行を見せたことも付記しておく必要があろう。

社会部門

企業経営の側面に位する労働問題関係の作品が平均してよく売れた。“人間関係”“日本の労働貴族”“恐るべき民青”“これからの労使関係”“現代の労働者”などがそれである。またかなり下火になったが，平和に対する関心の底流は“米中もし戦わば”“続南ヴェトナム戦争従軍記”となって現われた。このほか吉展ちゃん事件を扱った“一万三千人の容疑者”，中国の文化大革命で“燕山夜話”，創価学会的風潮に乗った“家庭革命”がそれぞれの角度からアピールした。なお“マルクス主義入門”“日本春歌考”“カラー版風俗の歴史”“20年後の世界”“なくてななくせ”など，41年の社会部門はバラエティに富む出版企画で賑わった。

文学部門

多くの作品がテレビとの相乗効果でベストセラーズに登場した。“徳川家康”“氷点”“おはなはん”を初めとして“青春とはなんだ”“かあちゃんと11人のこども”“湖の琴”“絶唱”“火山列島”“逃亡者”“嵐のなかでさようなら”などだが，出版とテレビとの関係が緊密の度を加えたことは十分注目されるところだ。また41年の特徴として“山本五十六”“戦艦武蔵”“あゝ同期の桜”など，旧帝国海軍へのノスタルジーを盛った作品がよく売れた。広い意味の復古ムードがここにも現われている。

次に全集物だが，各種の文学全集がランクの差はあっても平均して好ましい売行となった。“日本の文学”“世界の文学”“カラー版世界文学全集”“現代日本文学館”“豪華版日本文学全集”“日本文学全集”などの総合全集のほか“漱石全集”“吉川英治全集”その他の個人全集も好調だった。なお年の後半に初めての詩歌物“日本詩人全集”が10万冊を越える大部数でスタートしたことも注目されるところだ。

芸術部門

全集物を見ると41年も美術関係の企画は活発で“世界の美術館”“豪華版現代世界美術全集”“原色日本の美術”“世界美術全集”のほか“浮世絵”“世界の美術”“東京国立博物館”などが競合した。また音楽物としては“世界の音楽”が全集ベストセラーズに登場したことを挙げておきたい。

一方，単行本では芸能人の筆ずさび“女ひとり”“現代落語論”“あーやんなちゃった”“君といつまでも”が結構人気を得たのもやはりテレビの影響によるところが少なくない。

大体以上が41年のトピックとなる部門の動きだが，なおそのほかでも理学・学習参考書・教育・辞典など，その売行は何れも前年より1割を越える伸びとなった。その反面で厚生・工学・産業・医学は前年を下廻ったが，その落ち込みは1割弱に止まっている。最後に41年の年間を通じてのベストセラーズ（上位10位）を単行本・全集物別に掲げておこう。

単行本

1. 人間革命	池田　大作	聖教新聞社
2. 人間への復帰	庭野　日敬	佼成出版社
3. 氷　点	三浦　綾子	朝日新聞社
4. へんな本	野末　陳平	青春出版社
5. 海軍主計大尉小泉信吉	小泉　信三	文芸春秋
6. 私をささえた一言	扇谷　正造	青春出版社
7. 家庭革命	池田　大作	講談社
8. 五味マージャン教室	五味　康祐	光文社
9. 山本五十六	阿川　弘之	新潮社
10. 天皇ヒロヒト	レナード・モズレー	毎日新聞社

全集物

1. 世界原色百科事典　　小学館

2. カラー版世界文学全集　河出書房新社
3. 吉川英治全集　講談社
4. 世界の名著　中央公論社
5. 現代日本文学館　文芸春秋
6. 日本の歴史　中央公論社
7. 日本文学全集　集英社
8. 日本詩人全集　新潮社
9. 日本の文学　中央公論社
10. 世界の文学　中央公論社

雑　誌

活発な創刊活動によって月刊誌は発行点数・部数とも従来の水準を上廻る伸びとなった。また週刊誌も点数こそ1点増に過ぎなかったが，部数では6年振りの大膨脹で，こうした雑誌分野の好調は41年における出版活動の大きな特徴となった。次にその主な傾向を述べてみよう。

判型のワイド化

かねてから判型ワイド化の動きは一部雑誌に見られたが，41年にはその動きが俄かに顕著となった。婦人誌・服飾誌・婦人週刊誌を初め児童向の月刊誌や週刊誌が競ってAB判を採用した。またそれに伴って誌面の色彩効果が高められたことは勿論である。カラーテレビなど映像媒体からの刺戟もさることながら，マス化する雑誌間の競合によっていよいよ誌面のデラックス化が高められた。

セグメンテーションの波

活発な創刊活動にも示されているように，読者対象を細分化して確率高く捉えようとする動きが盛んに行われるようになった。いわゆるセグメンテーションで，既に39年には平凡パンチ，40年には宝石がそうした角度から創刊されて先鞭をつけたが，41年には現代・プレイボーイ・F6セブン・タウンなどが世にいう男性雑誌のスタイルで登場し話題を呼んだ。勿論セグメンテーションは既存の雑誌にも浸透し，逐次その実が売行にも反映しつつある。何れにしても41年は雑誌読者の細分化が一段と高まった年といえよう。

別冊，増刊の盛行

セグメンテーションとも関連して41年には別冊や増刊が多く出された。焦点を絞った編集によって読者の購読心を刺戟しようとする出版社の意図もその原因だが，一方で読者側にも定期購読に捉われないフリーな嗜好が高まっていることは否めない。唯，そうした風潮を背景に大衆誌関係で安易な低俗企画が多く見られ，出版倫理面から世論を呼んだことも事実である。

大部数誌の伸び

月刊誌には多くの分野があるが，その中で児童誌・大衆誌・婦人誌・総合文芸誌は他を遙かに抜く大部数を擁しており，それらを合せると月刊誌全体の略々6割に相当する。ところで41年にはそうした大部数誌が揃ってかなりの普及層となった。何といっても専門誌と違って広範な読者大衆に結びつくものだけに月刊誌のマスメディア的意義からも注目されてよい。また同様な傾向は週刊誌でも総合週刊誌・大衆週刊刊誌・婦人週刊誌・児童週刊誌の膨脹となって現われており，ともどもに雑誌が一段と大普及時代に入ったことを示している。

趣味関係誌の好調

美術・音楽，或いはカメラ・囲碁・将棋・釣り・旅行など万般の趣味に関する月刊誌が好調に伸びたことも41年の特徴といえよう。いうまでもなくレジャー的風潮に負うものだが，いわゆるディレッタントの増加が着実にその種雑誌の売行をカバーしていることも見逃せない。なお広い意味で，スポーツ誌の伸びも併せて挙げておきたい。

以上，雑誌分野での主な動きを述べたが，なお興味あるものとして受験学習誌・教育誌・語学誌などの教育関係誌・理学誌・工学工業誌などの自然科学関係誌，或いは月刊並びに週刊の経済誌がそれぞれかなりの普及増にあることも指摘されよう。

児童読み物の出版*

新宿区立落合第二中学校　今　村　秀　夫**
世田谷区立烏山中学校　黒　沢　　浩

はじめに

1966年1月から12月末までの総出版点数は24,392点で，そのうち重版は9,404点であった。このうち，児童出版物は2398点で，それは総出版点数の9.8％に当る。この数字の中には，重版物を含んでいるが，この年の児童図書の新刊書だけをみると，1045点で，全新刊物の7.0％を占めているというのが，出版年鑑1967年版による統計である。昨年（1965年度）の児童図書は全出版物の9.6％で，比率からみても，点数からみても，ここ2～3年はほとんど数量的には変わっていない。

また，児童図書の部門別点数は，表1のようになっている。文学の部門が圧倒的に多く，全体のほぼ65％近くもしめており，続いて歴史や地理および伝記を含めた部門が約13％ほど，第3位がマンガも含めた芸術部門，さらに自然科学の部門となっている。

表1　児童図書の部門別出版量

部門	点数	％
0	60	2.5
1	35	1.4
2	322	13.4
3	41	1.7
4	148	6.1
5	28	1.2
6	2	0.1
7	176	7.4
8	27	1.2
9	1559	65.0
計	2398	100％

1　創作児童文学

昨年は児童出版の特色として日本の創作児童文学が質量ともに高かったこと，外国の現代児童文学の紹介の盛んなことについてふれた。（読書科学34号）

1966年の児童文学書出版も前年の傾向をひきついでいるようである。日本の創作児童文学を出版しているところをみると，理論社・東都書房・講談社・講学館・盛光社・実業之日本社があり，低学年・幼児向きの図書も入れれば，あかね書房・小峰書店・福音館などというひろがりをみせている。

イ．戦争を描いた文学

小学校高学年から中学生を読者対象とした少年少女小説の中には戦争をいろいろな角度から取扱ったものが目立っている。

とくに日中戦争当時の作者の体験をもとにした作品は前年からあらわれていたが，本年も「パオの少年」（香川茂，理論社），「柳のわたとぶ国」（赤木由子，理論社）が出ている。いずれもおとなの起した戦争の犠牲になる子どもたちが，戦争の実態を見つめようとする角度で描かれている。また，短篇作品七篇を集めた「かあさんがんばる」（稲垣昌子，理論社）は戦時下の市民の日常生活を描いている。ある大学教師の家庭の母が三人の女の子をかかえて空襲や物資不足とたたかいながらすごす姿を語っている。このほかに，学童疎開の閉じこめられた世界を描き，子どもたちにとって戦争とは何かを追求している「いつか太陽の下で」（岡村太郎，講談社）

* Scope of the publishing world of juvenile books
** IMAMURA, Hideo (Ochiai 2nd Middle Sohool, Tokyo); KUROSAWA, Hiroshi (Karasuyama Middle School, Tokyo.)

や「昆虫人間の朝」（和田登，信濃教育会出版部）が出ている。また「あるハンノキの話」（今西祐行，実業之日本社）はその中の短篇で原爆投下に関連した話をハンノキに語らせている。

こうして，戦争のうち第二次大戦に素材を求めた物語は依然としてよく出版されているが，戦争体験の無い児童生徒が読者であることに特別な問題があろう。

「雪の下のうた」（杉きみ子，理論社）のなかで「屋上できいた話」は子どもが母親とデパートの屋上に登って景色を眺めながら，母親が戦時中にそのデパートの屋上に登ったときの体験を語る話であるが，日常生活の中で，それも戦争の問題と断絶したところにいる子どもに，戦争の含む諸問題をどう伝えていくかということを示している作品である。これは数篇収められた小説の中の一篇であるが，最近の児童青少年向文学のひとつの傾向を示している。

すなわち，読書である児童少年の立場から考えるならば，戦争を扱った小説のなかには子どもの生活問題に密着したところで筆をおこしながら，戦争の持つ問題に迫るものが欲しいところである。そしてその試みがみられるのも特色である。

ロ．子どもの問題をとらえる努力

つぎに，子ども不在などという批判も出ていたなかで，現代の子どもと子どもを取巻く状況を描いてその問題性を指摘した作品に「宿題ひきうけ株式会社」（古田足凡，理論社）がある。まず子どもたちにもっとも切実で身近かな宿題をとりあげ，主人公たちに宿題をひきうけて解答を作る会社を設立させている。この主人公たちの行為が宿題や受験に代表される子どもの本来の生活をゆがめている悪に対する抵抗として描かれている。子どもの論理がおとなの論理や価値判断に対して正当性を主張しながら，現代社会のもっとも根源的なものへ迫るといった発想が読みとれる実験的な作品である。題名のおもしろさばかりでなく内容でも子どもの共感を呼ぶものを持っている。このように子どもの主体性を主張する形で，換言すれば，子どもの要求や問題を作家が先取りする形で作品が書かれたのは新しい傾向である。

このほかに，母と娘の心の断層を描いている「いちばん美しく」（松井英子，理論社），混血児が周囲の好奇心にさらされながらも育て親の大工夫婦の愛情に見守られて明るく育ってゆく「青い目のバンチョウ」（山中恒，講学館），「海賊の歌がきこえる」（今江祥智，理論社）などがある。

また，「海の日曜日」（今江祥智，実業之日本社）は一人の少年が木馬から本物の馬に関心が移り，やがて関心が女の子に移ってゆく過程を，子どもながらの絶望感や挫折感をまじえながら象徴的な手法で描いている。

これらをみると，子どもを主体に置き，子どもの要求や子どもが解決を欲している問題を作家が先取りする形で文学的に形象させてゆくという，創作文学の新しい芽がいくつもあらわれたのが1966年の特色のひとつである。

ハ．地方土着の文学

民話や民俗に取材した作品や地方の生活に根を張った作品が目立った。小学校中学年を対象としたものとしては，「たべられたやまんば」（松谷みよ子文，瀬川康男絵，盛光社）など民話の語り口を生かした再話が「こどもの民話」というシリーズで出版された。また「ポイヤウンペ物語」（安藤美紀夫，福音館）はアイヌ民族の叙事詩ユーカラをもとにした物語である。高学年向きには「ふるさとの民話」（吉田タキノ，理論社），「くり毛の絵馬」（おおえひで，理論社）がある。後者は作者が戦時中三人の子どもたちと疎開生活を送った山陰の大山に伝わるくり毛の絵馬に関した話を再話している。短篇集であるが地方の風物を描きこんでユーモラスなたのしい話になっている。また，すでに述べた短篇集「雪の下のうた」（杉みき子，理論社）は雪国とそこで働く人々の生活が地方色豊かな風俗を背景に語られている。こうした短篇作品は同人雑誌に発表されて，直接子どもの目に触れる機会がすくなかっただけに，こうしてまとめて出版されてみると，作品集としての価値は，子どもの関心にかかわる地方土着の生活を描いたものであること

に，新しい貴重な収獲とみることができる。

ニ．その他

小学校低学年から中学年にかけてを対象としたオリジナルな作品のなかで，小峰書店の「創作幼年童話」シリーズには，佐藤さとるの「おばあさんのひこうき」や松谷みよ子の「ふうちゃんの大りょこう」などが注目される作品である。また，ライオンやとらなど猛獣の一ぴきもいないオーストラリアでのカンガルーの物語「ぼくらはカンガルー」（いぬいとみこ，福音館）がある。

児童文学作品に短篇集がまとめて出版されたこともこの年の特色である。「かくれんぼ物語」（今江祥智，理論社），「雪の下のうた」（杉みき子，理論社），「ぼくらのペガサス」（木島始，理論社），「ビルの山ねこ」（久保喬，盛光社），「五時間目のノート」（香山美子，実業之日本社）など，過去に同人雑誌に発表されたものや一度は出版されながら事情があって多くの子どもたちの目に触れ得なかったものなどが，このところ再刊されたのが注目される。

また，動物文学として，あすなろ書房の「母と子の読書シリーズ」の中に，椋鳩十による「三ぼんあしのいたち」などが低学年向きに出ているし，高学年向きでは「草原のみなし子」（安藤美紀夫，理論社）が同著者の「白いリス」につぐ長編動物文学である。

なお，フィクションのなかで「八月の太陽を」（乙骨淑子，理論社）はスペインとフランスに分割支配されたハイチ島の独立と奴隷制からの開放のために闘った黒人指導者トウセンの物語であり，歴史的事件に取材しながら，なお今日的な意味を持つ物語を児童文学のうえで試みている。久保喬の「ネロネロの子ら」（東都書房）は原始的社会から東京へきた子どもが文明社会批判を試みるというものである。

いずれも作者が自分の考えを作品のなかにどう表現するかに積極的にとりくんだものとして，この年の代表的な作品のひとつとなりうるだろう。

2 外国児童文学の翻訳

つぎに，翻訳による海外のオリジナルな作品の出版状況をみてみよう。

海外の現代児童文学作品は，日本のオリジナルな作品の場合と同様，ほとんど全部がシリーズ形式をとっている。単行本として出版しているのは，福音館，岩波などが，数量的にも僅かである。これは，全くの商業主義によるもので，販売のためのものである。このように，名作物シリーズはもちろん，オリジナルな内外の児童の文学部門は，すべてといっていいほど，シリーズ形式をとっていることは指摘しておかなければならない問題である。

昨年度同様，本邦初訳ともいうべき，現代の児童文学が，中学年を中心にしてかなり出版された。つぎにそれをあげてみよう。

「新しい世界の童話シリーズ」（学習研究社）には，ローソンの「ウサギが丘」や，読書感想文コンクールの課題図書になった，ギュットの「ムスティクのぼうけん」など，3～4年生向けの優れた作品が今年も出続けている。

「こども世界の文学」（あかね書房）も，3～4年向きのシリーズで，エヴィソンの「空とぶ自転車」，A・ゾンマーフェルトの「アグラへのぼうけん旅行」などを含めているし，「世界の子どもの本」（偕成社）でも，ヴォロンコーワの「フェージャかえっておいで」，プロイスラーの「大どろぼうホッツェンプロック」など，多彩な，諸外国の作品がつぎつぎに出版されている。

1～2年生を対象とした偕成社の「世界の幼年どうわ」では，象のひきおこすゆかいな事件を扱ったストロボキン「サーカスの四月ばか」や，リンドグレーンの「ロッタちゃんのおひっこし」などはこのシリーズに入っている。

シリーズでなく，単行本として福音館では「きつねものがたり」（ヨゼフ・ラダさく・え）というユーモラスな作品や，ウィルヘルム・テルの伝説物語「テルのむすこ」（ヒューリーマン）などを出しているのは，高く評価された。岩波書店でも，マルシャークの作品「魔法の

品売ります」が注目された。

高学年向きでは，新日本出版社「世界新少年少女文学選」が，アジア各国の新作品を紹介するなど，異色の出版を続けている。「川をわたる歌声」（菅忠道編）や「ピオネール放送局」（エフゲニー・ルイス）など，しだいにアジアから世界各国の作品に拡がりをみせている。

岩波書店で思い起すのは，全世界の児童文学の中で，五指に数えられるだろうと名声の高いルイスの「ナルニア国ものがたり全7巻」が出版され，子どもたちの間でもかなりの人気を集めていることである。これはこの年の大きな収獲の一つに数えられるだろう。

また「ハンニバルの象つかい」（バウマン，岩波書店）は第二次ポエニ戦争（ハンニバル戦争）に加ったひとりの象使いの少年の目を通して戦争の姿を見たものである。都市の滅亡，山岳戦など大遠征のなかで人と人の憎しみ合う戦争についての評価がある。これは日本で戦争を扱った創作物がよく出版されている現状に立ってみるとき，読み手の側にひとつの戦争観を提示しているともいえよう。

そのほかに「世界名作動物小説」（実業之日本社），「ジュニアライブラリー」（理論社）などが，高学年以上を対象に出ているシリーズである。

このようにしてみていくと，内外ともに，オリジナルな児童文学の出版が盛んで，従来みられたような，世界の古典的名作へのもたれかかりは解消しているようにみえる。だがそうはいいきれない。オリジナルな作品がかなり多く出版されるようになってきているのは事実だが，名作物語の出版は60～70%を占めているといわれる。上半期には，講談社と河出書房が「世界の名作図書館全52巻」と「少年少女世界の文学全26巻」のいずれも，カラーの挿絵による世界名作としてスタートさせ，児童出版界の話題になった。

3 絵本

絵本の世界は，幼児から3年生ぐらいまでを対象に，いっそう多彩になってきている。すでに福音館や至光社の絵本は外国へ輸出され，国際的にも高い評価を与えられている。ことしは福音館・至光社・岩波書店などのほかに，かなりの出版社が絵本を手がけかなり豊かに出廻わっていた。

偕成社は，「世界おはなし絵本」というシリーズのもとに，ミハルコフの「三びきのこぶた」などを出したし，「せかいの絵本」（ポプラ社）でも，「おばけのラーバン」（サンドベルイ）など外国の絵本の翻訳が刊行されている。外国の絵本といえば，「ウェザヒル出版社」によるアメリカの新絵本が，日本の市場にのりこんできたことも，この年の大きなできごとであろう。ただ，日本の子どもたちにピッタリくるような選択ができているかどうか疑問もないではない。

一方，海外の優れた絵本の翻訳の多い絵本の世界にも，しだいに，日本のオリジナルな絵本の誕生という現象が目立ってきていることは喜ばしい。「つきがみていたはなし」（もりひさし作・ふたまたえいごろう絵・こぐま社）のものや，オリジナル絵本ではないが「ひろすけ絵本」（偕成社）のようなものも出ている。

絵本でやはりつけ加えておかなければならないのは，かつての「こどものとも」の傑作が選ばれてかなり再版されたし，世界傑作絵本シリーズ（福音館）の出版も，かなりされていた。「おやすみなさいフランシス」（ホーバン文，ガース・ウィリャムズ画）などはきわだったものの一つであった。

このようにすぐれた絵本の出版につれて，子どもの本の挿絵についても，送り手も，受け手もしだいに目をとめる風潮が出てきている。外国のすぐれた挿絵が，そのまま使われている場合がよくみられたし，「セロひきのゴーシュ」の挿絵を書いている茂田井武の作品なども注目されている。挿絵のカラー化がいっそう進められていく折から，絵本に限らず，挿絵についても出版社側では細かな注意を払いはじめている。文章だけでなくこうした挿絵についても注意していきたいと思う。

4 ノン・フィクション

表1にみられるように，児童出版物の65%が文学作品でしめられている。このほかにも文学作品に類するものが，0部門などにも入っているので，実際には70%以上という圧倒的な多数量が文学作品ということになる。児童図書の出版がどうしてこのように，文学部門にかたよるかというと，次のような理由が考えられる。

(1) 親子読書や家庭読書など，文学を中心にした利用が多い。

(2) 学校での教科学習での図書利用などは行われず，受験のための詰込み学習が横行している。

(3) 適当なライターが少ない。

(4) 文学のように，いつまでも，そのまま再版することが不可能である。

つまり，書き手も少ないし，手間がかかる割に売れないということから，出版者も手を出さないのである。

そういうわけで，この年のノン・フィクションは前年にくらべ，いっそう低調であった。創作を中心とする文学部門の隆盛と反対に，非小説部門はさびれていくような気さえする。

まず，伝記部門で，前年から続刊している「さ・え・ら伝記ライブラリー」（さ・え・ら書房）は，「辺境を歩いた人々」（宮本常一）などの好著を続出している。このシリーズは，それぞれの部門の専門家の手になる文化史的な色彩のユニークな伝記物語である。その他にも，数社から児童文学者たちの手になる伝記読物が出，それなりの特色はもっているけれど，新鮮味もなく，たいしたものも見当らない。中では，「N・H・Kある人生」（全3巻　岩崎書店），「この人に学ぼう」（全5巻　講談社）は，従来はんらんしていた伝記型人物でなく，庶民の中から新しい素材を発見しようとしている意欲は光っていた。

「少年少女おはなし日本歴史」（全15巻　岩崎書店）「少年少女日本百年史」（全12巻　盛光社）「少年少女日本の歴史」（偕成社）など，さらに，地理では，「新しい世界地理」（全8巻　偕成社）が出ているが，従来のものにくらべ，とくに出色のものとは思えない。

自然科学の読物は，ほとんどこれというもののない年であった。僅かに「恐竜の世界」（ジム　福音館）と「わたしの野性動物記」（阿部襄　牧書店）があるが，後者は同著者の「貝の科学」にはおよばない。相もかわらず生物関係が多く，物理・化学・技術関係はほとんどないありさまだが，その生物関係では，図解を中心としたもの，図鑑の類が目立った。「原色図鑑生物百科ライブラリー」（全7巻　北隆館）もその一つである。

科学物のシリーズでは，講談社の「学習・目で見る科学」が，科学・技術の各分野にわたって出版され続け，「理科の実験」（白井俊明）などは，新しいタイプの実験の本であった。

このように，ノン・フィクションの分野，特に自然科学部門の出版の先細りは，年ごとにひどくなっている。文学部門で競い合うばかりでなく，非小説部門こそいまだに日本では未開拓地的現象を呈している。この方面に大胆にのり出す出版社はないものだろうか。

む す び

なお，全般を通じてみられることは，読書感想文全国コンクール課題図書の選に入ることが刺激になっていることに象徴されるように，学校図書館活動や読書指導の進展に刺激されて出版が活潑になっていることである。

しかし，一面では，文学以外の図書の出版の少いこと，海外児童文学の翻訳にみられるように，互に作品を競って出版し，安易な出版になっているのではないだろうかということに対する心配がある。とくに日本における創作文学の出版のリスクを考えての安易な出版傾向となっていないだろうかということである。日本人による実験的作品をさらに多く出版する努力が欲しいところである。

児童雑誌の動向と問題点*

成 蹊 小 学 校　谷 川 澄 雄**

児童雑誌の一年

児童雑誌は，その出版量からいって，娯楽雑誌と学研・小学館など学年別編集の学習雑誌・科学雑誌などが中心となり，およそ50種類あまりが刊行されている。このうち直販形式をとっている学研の雑誌は，その浸透力が強く，とくに低学年ほど多く読まれている。昭和42年3月調べの次の表によっても，このことがよくわかる。

今月読んだ雑誌（都下市・村調査）

2年生（男16・女16）		4年生（男29・女16）		6年生（男15・女14）	
2年の学習	14	4年の学習	11	6年の学習	6
2年の科学	19	4年の科学	16	6年の科学	11
小学2年	13	小学4年	10		
少年マガジン	10	少年マガジン	12	少年マガジン	6
少女フレンド	9	少年サンデー	19	少年サンデー	13
りぼん	7	少女フレンド	8	少女フレンド	2
少年サンデー	5	少年画報	10	少年画報	2
		マーガレット	6	マーガレット	4
		りぼん	5	りぼん	3

ところが，高学年にすすむにつれて，しだいに雑誌の性格を娯楽を対象としたものと，“子どもの科学”など専門的な楽しみを求めるものとに割り切って考えるようになっていく。

また，学研の雑誌は直販形式をとるために担任教師の取捨選択が，大きく子どもの購読に影響している。こうした学年別編集の雑誌は，学習を援助する意味で編集されているので問題も少ない。

そこで，ここではもっとも出版量も多く問題も多い児童娯楽雑誌について，いくつかの動向をとりあげてみることにする。

○月刊少年誌（6誌）

「ぼくら」「まんが王」「少年」「少年画報」「少年ブック」「冒険王」

○月刊少女誌（2誌）

「なかよし」「りぼん」

○週刊少年誌（3誌）

「少年サンデー」「少年マガジン」「少年キング」

○週刊少女誌（2誌）

「少女フレンド」「マーガレット」

以上の13誌が臨時増刊を加えて出版され続けている。

依然多いギャグマンガ

1965年度～66年度にかけては，「おそ松くん」（赤塚不二夫）「おばけのQ太郎」（藤子不二雄）「丸出だめ夫」（森田拳二）などを筆頭に，ギャグ・ユーモア・ナンセンスを主体にしたマンガが隆盛をきわめ，正月のテレビでも喜劇俳優のほとんどが，「おそ松くん」の「イヤミ」のまね，シェーを連発するほどであった。こうしたギャグマンガの隆盛は，1966年11月号少年画報マンガ13篇のうち「怪物くん」「でこちん」など重要な4篇を占め，「ぼくら」マンガ8篇のうち3篇，「マンガ王」12篇中5篇が数えられていることでもよくわかる。

こうしたギャグマンガは，1967年上半期でも依然子どもたちの人気を浚っていて，小学2年生で「怪獣ブースカ」小学4～5年生で「おそ松くん」がいずれも，もっともおもしろいマンガとしてあげられている。

しかし，「忍者ハットリくん」「おそ松くん」「おばけのQ太郎」などに刺激されて，われもわれもと悪ふざけを書きまくったマンガは，いずれも亜流として，以上の作品を越える人気を得ることはできなかった。

---

* Scope of the publishing world of juvenile magazines.

** TANIKAWA, Sumio (Seikei Primary School, Tokyo)

「ぼくら」11月号「いたずらっ子あつまれ」などは，「とうちゃんがトイレにはいって，かみとってくれといったら，サンドペーパーをわたしてやれ。」「ちり紙をくちゃくちゃにして，おみそをち一とつけ，女の子の机に入れてみな。」などのように，作品としても愚劣化して，わずかに「ロボタン」（森田拳二）「怪物くん」（藤子不二雄）などが子どもの人気を得ているにすぎない。

消えた戦争・忍者マンガ

戦後，ストーリーマンガが子どもマンガ界の主流となって以来，はなばなしい空中戦・陸上戦車軍の戦い・迫兵戦などを描いた戦記マンガ，白土三平を中心としたせい惨な忍者集団の死闘を扱った忍者マンガなど，暗く緊張度の高いもので埋められていた雑誌に，こうした作品がほとんど見られなくなった。特に，大学生が子ども週刊誌を愛読するとて新聞紙上で話題になったのも，この「忍者武芸帳」「ワタリ」「カムイ伝」など，白土三平の描く農民一揆と忍者の関係など，質的にかなり高度なものがあったからである。

ところが，これらの作品は，新書版のコミックスとして単行本となると，子ども雑誌から離れていってしまった。

‘66年11月号では，忍者マンガはわずかに「ぼくら」の「狼小僧」（白土三平）50ｐにわたるもの，戦記マンガは10月16日号「少年サンデー」の「Dライン」（小沢さとる）以外には見当らなくなってしまった。

アクションマンガ

では，これらの忍者マンガ・戦記マンガに代わるストーリーマンガは，どんなものが主流になったかというと，その一つにアクションマンガがあげられる。

少年画報‘67年9月号から新連載の「炎のファイター」真樹日佐夫（原作）佐藤まさあき（劇画）など，その代表的な例である。鉄道疑獄事件にからんで失脚し，死んだ父親のうらみをはらそうと，悪徳社長をねらう少年を主人公としたアクションである。こうしたマンガはすでにマンガではなく，文字どおり劇画という性質のものであろう。おとなの探偵小説をそのまま劇画したものであり，ピストル，短刀などで復讐をせまる少年のすがたなど，幼い少年少女の読むものとしては刺激が強すぎる。

こうしたアクションを主体とした長篇マンガは，どの雑誌にも見られる。「ぼくら」では，ガードマンの活躍を主体にした50ｐにもわたる「ガードマン7」（園田光慶，）産業スパイをめぐるアクション「少年ハリケーン（堀江卓），「まんが王」では西部劇をマンガ化したものとして，「三匹のガンマン」（堀江卓）「少年」・「ザ・シャドウマン」（さいとうたかお）「冒険王」・「台風五郎」という探偵マンガなど，枚挙にいとまがないほどである。こうした社会の犯罪・暗黒面・近代ヤクザなどの世界を描くマンガが，最近の児童雑誌の主流をなしつつあることは，画面がリアルであるだけに，子どもに与える刺激も強く，おとなの犯罪映画をまい日のように与えているのと同じような結果をもたらしている。

宇宙怪獣マンガ

テレビ映画「ウルトラQ」から「ウルトラマン」それに「マグマ大使」などの成功によって，宇宙怪獣マンガも誌面をにぎわせたが，最近号ではそれもまた下火になり，「ぼくら」の「ウルトラマン」（一峰大二）「まんが王」の「ビッグ・トーリィ」（桑田次郎）「少年画報」「怪獣王子」（石川球太）「少年マガジン」の「キングコング」（一峰大二）「幻魔大戦」（石森章太郎）「少年サンデー」の「キャプテン・ウルトラ」（小畑しゅんじ）など，現在テレビ映画化されているもの以外には新鮮味がなく，これらの作品も次第に荒唐無形化して，衰退の道を辿っている。

もともと「キングコング」「ゴジラ」などに発祥する，これらの怪獣や宇宙怪獣は，人間精神内部のたたかいとして生まれたものであったのに，しだいに新奇をてらって空想的な怪獣をつぎつぎに産み出す傾向にはしってしまった。そのため，ストーリーに変化や深みを与えることができなくて，いずれも同巧異曲のものとなってしまった。それが，怪獣ものの衰退の原因であろう。

今では，めんこにまでなってしまった怪獣は，幼児のおもちゃになり，むかし子どもたちがすもうとりの写真を見て，とっさにその名が浮かんだと同じように，ネロンガ・ゴメス・ナメゴン・ペギラ・カネゴンなどと，口をついて出るありさまである。

怪奇グロテスクマンガ

1965年～1966年にかけて，少女雑誌に登場した，楳図かずお・古賀新一・はまえりこなどの描く恐怖を売りものにした怪奇グロテスクマンガも，しだいに衰退してきている。「べにぐも」「へび少女」「白へび館」「黒い猫面」「かれ葉の少女」など，因果と復讐・のろいなどを描いたこれらの作品は，「鍋島の猫騒動」などをまねたストーリーで，霊魂が現代によみがえり，少女にのりうつって，罪のない現代少女をおびやかすのである。

これらの作品は，いちように画面がみにくく，「路上を，くちびるだけが，ひくひくと動いていく。」といった場面や，「少女の手が，からだが，へびに変じて，それがずるずると，たたみをすって伸びていく。」といった場面が，いくたびもくり返されるのである。

こうした繰り返しが，しだいに子どもたちに倦きられてきている。

「少女フレンド」・「赤んぼ少女」（楳図かずお）「少年画報」・「笑い仮面」（楳図かずお）「ぼくら」・「じごく」（江原伸）などが残っている。

恋愛マンガ

ユーモアやオセンチマンガが主であった少女雑誌のマンガの主流は，最近とくに「恋愛マンガ」にかたよってきている。それも，年令を無視した恋愛の三角関係を描いたようなものが多くなっている。

「少女フレンド」・「ナナとリリ」（田中満智子）「湖に消えた少女」（花村えい子）「白いリーヌ」（飛鳥幸子）は，いずれも三角関係が描かれ，「湖に消えた少女」には，さらに継母をからませている。

「なかよし」も同様で，「その人は昔」（松井由美子）も，題名を見ただけでは，婦人雑誌の小説を思い浮かべそうである。

また，「マーガレット」「おしゃれなパリ野郎」（北原百合子）も長篇恋愛マンガである。

これらの少女週刊誌・月刊雑誌の読者が，小学校の二年生からであるとすると，慄然とせざるを得ない。とくに，貧乏・不幸にさいなまれる少女が決まって，すなおな明るい娘であり，恵まれた環境にいる少女が，いじの悪い・嫉妬深い性質といった設定と，おしまいには必ず不幸だった少女が幸福になるという定式から抜けきれないでいる点。継母・おじ・おばなどが，冷酷非道に描かれている点。恋愛の相手を獲得するために，あらゆる奸策を用いる点など，およそ以前からの少女マンガの域を脱していない。

少年・少女誌に望む

いずれにしても，こうした娯楽雑誌にも子どもの心を暖める事実物語・中間小説的な小女小説・少年小説などを入れてほしいものである。

1967年9月号を中心に，ページ割りを見ると，

誌　名	総ページ	マンガページ	読むページ
少年画報	396	275	38
少年マガジン	272		0
少年キング	240	156	22
マーガレット	244	185	36
なかよし	348	212	22

のようになっている。

このようなページ配分は，子どもの娯楽雑誌といえるのだろうか。いわゆるマンガを主体とした少年少女雑誌を，このまま認めていくとすれば，やはり読み物を主体とした少年少女のための雑誌がそろそろ生まれてもよいのではなかろうか。

GENERAL SUMMARY

1. Publishg world in Japan

The general condition of the publishing world was a prosperous cne last year. The number of issues increased by 21% above the preceding year in books, 8% in monthly magazines, and 14% in weeklies. Gross sales were estimated at ¥ 248 billion, a 21% increase.

(1) Books : Serial publications, including encyclopedias, were planned in various fields and sold well, although expensive. Many best-sellers came from among paperbacks. Ganerally, there was a tendency toward non-fiction and classics. More precisely, themes refering to the new approach to Japanese and world history, criticism of past and present wars, and the theory of life based upon these were highlighted. The fields of sociology and economics also sold well. Books dealing with travel and leisure time are on the upsurge.

(2) Magazines : Literary magazines and those for children, adolescents, and women, accounted for 60% of all monthly magazines like last year. Some of them increased their size, used more color, and showed specialization for professional readers. A new Play boy-type of magazine for young men made its appearance and some of these were accused of being vulgar.

2. Reading materials for Juveniles

(1) Books : Juvenile publications represented 9.8% of the total books published in 1966, and totalled 2,398 different works. This ratio is almost equal to the year before. Literary works made up 65% of this total, followed by history, geography and biography (13%), fine arts and comics (7%), and natural sciences (6%).

Literature progressed both in quality. Among newly-written ones, there were still many war stories, in which children's sacrifices due to wars caused by adults were often the theme. Other good stories discussing children's ways of life were also written. Besides translations from foreign classics, there appeared the tendency of introducing new works from abroad.

We regret that non-fiction works, particularly in the natural science field, were falling off year by year.

(2) Magazines : There are about 50 Juvenile magazines in Japan, almost all of which include comics, whose characters have gained popularity on television. In other comics, war heroes and invisible men, that had been popular before, decreased in popularity, while action stories about criminals and detectives increased. Monsters are on their way out as they have become stereotyped. In comics for girls, the main themes are on terror and distorted love, against which Japanese feel strongly.

公共図書館の読書運動*

日本図書館協会　植田喜久次**

1. 公共図書館における読書運動の基本概念

図書を介在とする読書運動には，普通二つの型が考えられ実行されている。

①読書の質的効果を狙ったものでそこから指向するものを導きだす社会運動的な読書運動。

②読書の効果は派生的なものとしてとり扱かい，読書そのものを直接の目的とする読書運動。

①の型態は，戦前に多く打出された傾向が強く，具体的には「読書会・図書群の運動」などに代表される。これらは，ともすると思想統制の傾向が悪くすると流露されて，運用者の方法如何によっては，良くもわるくも一定方向への作用を伴わせる性質を内包している。また，それが失われているものとすれば，その読書運動は本質が損われているものといわねばならない。

②の型の読書運動は，①にみられる性質は稀薄なものとなり，むしろ読者の量的把握を第一義とする傾向が強い。読書人口の育成に，その目的があるといってもよい。

公共図書館で現在おこなわれている読書運動は，②の型態の色彩で押し進められているといえる。これは，読書のもたらす種々の効果を前提の条件としても，公共図書館の利用者層の開拓にその本質があるといえ，読書運動は利用者層への巾広い浸透であるとされる。

公共図書館が読書運動を進める場合，その第一の命題とされるのは「読書の自由の確保と推進」である。この場合読書の自由とは，たんにこれまでよく問題とされた表現の自由，つまり出版の自由を損うものからの解放という意味よりも，読書疎外現象からの解放といったほうが至当であろう。

1966年における公立図書館数は752で，前年度に比較して15館の増をみた。1966年4月1日現在においての市町村立図書館の設置率は次の通りである。

表1　図書館の設置率（1966．4．1.）

	市区町村団体数	図書館設置団体数	設置率%	1961年設置率%
市区立	※ 583	※ 375	63.4	62.7
町　立	2,000	194	9.7 } 7.5	6.4
村　立	815	16	2.0 }	
計	3,398	585	17.2	15.6

（※区立とは，東京23区をさす。図書館設置団体数は，一つの都市に団書館が複数存在しても，一つとしてとり扱っている。）

図書館の設置率は，1961年に比較して5年の時日を経ているのに1.6％の増にしかすぎず，依然として図書館の不在現象は解消されていない。県立図書館所在地における市立図書館の設置率は52.2％であって，残りの47.8％（22市）の県庁所在市においての未設置現象は，問題とされねばならない。この図書館不在現象を人口比でみるなら，日本の人口の中でその居住している市区町村団体の図書館と接触できうる人口は，約56％である。（この場合，県立図書館の活動地域は除く。）図書館活動の享受人口が約56％といっても，公民館図書部の存在を考えるなら，だいぶ割増ししなければならないであろう。

この施設状況は，1966年度においても殆んど変りはない。これでみると区立を除いた市町村立図書館の併設館は，全体の43.3％も占める。併設館の中で公民館の占める割合は，258館のうち141館で54.6％と非常に大きな位

* Reading movement of pubic library

** UYEDA, Kikuji, (Japan Library Association)

表2　市区町村立図書館の施設（1965．4．1.）

	独立館	併設館（主内訳）
市　立	273	118（公民館57，市役所17，市民会館12）
区　立	33	19（区役所7，区民会館7）
町　立	55	128（公民館75，町役場24）
村　立	4	13（公民館9）
計	370	277

置を占め，公民館と図書館の二枚看板性を如実に示しているといえる。社会教育施設への理解の欠落と混乱および貧困は，図書館の問題でいえば先述したところの「読書の自由の疎外現象」を招来しているといえる。図書館の未設置地域をどうするかばかりでなく，図書館個々のサービス・エーリアの問題が，読書の自由の疎外現象を解消する鍵となる。近代社会においての公立図書館の存在は，必要不可欠の条件となるもの，ということで公立図書館は，一般地域住民との間とのつながりを健全に保たねばならないものとなる。ブランク・エーリアとウィーク・ポイントのカバー，および図書館のサービス地域内での未利用者層への浸透とか，公立図書館にとって改めて配慮させ取組ませねばならない問題となって，読書の自由を確保する手段としての「読書運動」が課題となってくる。

そこで読書運動は，奉仕理論として打出されたものというよりも，図書館奉仕のための政策として爬行された色彩が濃い。現代社会における知的自由の権利保証という名のもとに読書運動は進められているものの，一方では図書館数や増加図書冊数の不足によってより一層離合集散するところの利用者層に対しての離脱から接触への防衛策といえなくもない。つまりは，読書運動という名称は与えられていても，図書館サービスの積極的な拡大策なのであって，戦前より呼称されていたいわゆる図書館運動で行動を付随したポリシーなのである。つまるところ（1）図書館の開発で，それは①サービスの普遍化と妥当化（格差解消と全体水準の引き上げ），②図書館構造の適正化（単位図書館の規模と配置，サービス・ポイントの種類・組合わせ・配置，図書館網の組織等），③，図書館財政の妥当化（サービス責任の配分；運営主導権や査察権の帰属，財政負担率の合理化等），④サービスの生産性引き上げ，なのである。

2. 読書運動の効率

1965年度（1965．4．1．～1966．3．31.）における，公共図書館の館外個人貸出登録人数は，自動車文庫による約22万人を加えると100万人であって約1％の登録率であった。これらの人達に貸し出された1年間の図書冊数は，自動車文庫の144万冊を加えて約1,033万冊，1人当年間約10冊の図書を借りていることになる。これでみると図書貸出の効率はそう悪くないことになるが，何としてもの問題は登録率のことである。フィリピンの10.2％，ニュージランドの24.2％，ブルガリアの28.1％，チェコスロバキアの21.3％，ハンガリーの20.2％，スウェーデンの16.8％，フィンランドの15.9％（以上いずれも1964年度）など諸外国に比較して著しく低い。これは，図書館の未設置地域が存在していることと同時に，人口の適正な単位規模に相応した図書館網の配置がなされていないことによる。単位図書館当りのサービス・エーリアは，半径2Km以内であると明言されているが，この原則は具体化されていない。ということでこれを補う手段として団体貸出（グループ貸出）・貸出文庫など組織を対象とするサービス方法が採用され，大巾な読者（図書館利用者）獲得と図書の貸出効率の昂揚が狙いとされる。1965年度における登録団体数は約3万2千団体で，約550万冊の図書を貸し出している。（この550万冊は，図書館が当該団体に貸し出した図書冊数であって，団体内での利用図書冊数ではない。）

貸出効率をあげるための主要事となっているのは，連絡調整の密な中継地点（学校・教委・公民館・その他）の確保と，各種団体に適合した図書の供給（農業文庫・産業文庫・その他）である。これらのことは，種々と関心が集中されて打開策が練られてきたが，その一つとして近年読者大会・利用者大会などの催しによる利用者の

組織化に意が注がれつつある。利用者の組織は，利用対象の正確な把握によって図書館と利用者との間の図書の流通経路を安定化させる性質を有している。それと共に利用者組織という核が，その外包に向かって働きかける現象を期待しているものである。

3. 読書運動のうごきと課題

(1) 読書グループ

読書グループと呼称されているものには，図書の貸出をうけるのみのグループと，前者に付加して読書会を行ない更に読書感想文などの文集を発行したりするグループがある。後者の場合は，読書サークルなどとも称されるが，グループとサークルという言葉に厳密な意味での差違はない。現在のところ読書会を実施したりする団体は，図書館に登録されているもので約１万団体であろうといわれる。これら団体の構成は，種々相で婦人団体・青年団体・地域団体・職域団体・ＰＴＡなどがある。その中でも特に地域団体・ＰＴＡを含めて婦人を主とする構成が最も多い。

読書グループないしは読書会の運営で問題とされていることは，読書会のリーダーないしはグループの世話人の煩雑さである。リーダーの場合は，読書会の興味と円滑さと維持運営に備えねばならないし，世話人の場合は，図書の選択および貸出に対する会の発展への働きかけが付随してきて，リーダーと世話人の責務は重いものとなってい，運営の方向如何はこの人々にかかっている。このことで図書館としては，リーダーの発見と育成を心がける必要が生じてくる。リーダー研修会・世話人同志の話し合いがもたれるのは，以上の理由によることが多いが，リーダーや世話人自身の興味の持続策も加わっている。そのほかグループに対する働きかけとしては，会自身のマンネリを防ぐ意味と会の助長と円滑さと拡大を図る意味で，読書グループ同志の交歓会がもたれたりしている。浜松と豊橋，または徳島と滋賀とかいった県単位のものもあれば，その街の中での小規模な合同読書会など。前述した読者大会は，この種のもので最も大きな規模の催であって，組織化とそれ自身の宣伝と拡大策を狙ったものである。毎年11月の読書週間の時期に開かれるのが通例で，皮切りの長野をはじめとして静岡・愛知・岐阜・滋賀・福井・大阪・青森・茨城・埼玉・横浜・大宮……など各地に展開されている。

しかしながら，この種の積極策があるとはいえ，人口比にすればまだまだ数が少ないのであって，グループに対する働きかけでもって読者数が得られたわけではなく，グループ数の拡大は読者構造の核の増殖と理解し，図書館数の増加による日常の接触が必要とされる。

(2) 読書興味の発達と読書習慣の形成

読書をすすめる働きかけとして肝要なことは，それぞれの人々にどのような図書を配するかということであって，個々人のパーソナリティと興味にあった適切な図書を遇することは至難な技とされる。読書運動との最初の働きかけは，読書興味の誘引であり，その意味で図書館による図書目録の発行は，基本的な仕事とされねばならない。青少年に奨める100冊の本とか，家庭婦人に奨める図書100選という類の解説付目録の発行が盛んになってきたことは，上記の趣旨に沿ったものである。愛知・静岡・岐阜・埼玉・福島・東京・滋賀・大阪・徳島・福岡・長崎・鹿児島・山口……それぞれの地域・それぞれの図書館で発行されている。

児童に対するものとしては，一般刊行書の中に学齢別に対象の図書が掲示されている例が多くなってきた。これらのことは，読書運動をすすめる図書館員が資料源（図書）の素材をより一層把握することの必要性を痛感させている。解説付目録の発行にしても，資料への精通法にしても，県段階の地域協力などを施して研究援助しあい，より充実度のあるものにしたい。

図書館の発行物としては，図書目録の他に文集などの発行がある。文集の発行も目録の発行と共に盛んになってきた。これは読書興味の育成に少なからぬ効果があり，読書運動の一種として「図書館の記録活動」と確認すべきことがらである。集団読書の読むことから話すこ

と，書くことへの移行現象ともされるが，特に児童を対象とする場合は効果がある。読書感想文コンクールにまで発展させるのは，児童に負担がかかるということで少なからぬ問題が散在するが，岡山市立・江戸川区立・高岡市立伏木・クローバー子供文庫とか各地の図書館で作られている児童の文集は，読書することの嬉しさを素直に伝えてくれる。記録活動は，あまり束縛することなく自由な雰囲気の読書を助長し，読書を習慣づけるものとして大切にしていきたい作業の一つである。

青年や婦人の記録活動もまた各地に展開されている。1966年に発表されたものでユニークなのは，上田市立図書館における創作グループの活動であろう。これは，いうまでもなくＰＴＡ母親文庫の活動から発生したもので，自己の思考を確認し，発表し，的確に位置させていくことへの喜びの活動といえる。

多くの場合，図書館の記録活動は，読者による読書することの再確認とその発展作用であって，記録活動そのものが目的となるものではない。しかしながら，この視点を見失う傾向もなくはなく，それと世話人の役割に負担がかかることもあって継続させていくことの難しさが伝えられている。こうした意味では，全国的に連絡しあって何らかの交換作用がもたらされてもよい。

(3) 読書運動の方法の再確認と展開法

奉仕活動の確認と討議研究のために，毎年ブロック毎の・地域ごとの研究会が開かれる。いろいろの大会とか社会教育研修所での研修会も加わって数としては多くなってきたのに，積極的に持続し発展させていく効果が少ないのは，研修会自身・参加者自身の積み上げが足りないことによる。

1965年末より館界の中に設けられた読書運動の方法研究会は，これらに対する解決策が求められたわけである。研究会では，実践方法の浸透策に最大の主眼がおかれ，館界奉仕思想の枠から脱却して日常の活動状態に転換することの作用が進められた。1967年には，報告書が上梓されることと思うので，これにより上積み作用が多くの協力と検討によって期待されてよい。

読書運動は，たんに一館だけの問題として解決を図るよりも，むしろ地域単位で協力しながら大きく展開を図った方法が効果があることは，長野・鹿児島の例で明らかである。この点読書運動関係の組織問題も内部対策の欠如としてうかんでくるが，この際研究協力を大いに進める必要があろう。まだまだ情報交換でさえ十分なされているとはいえないのだから。

(4) 図書購入費のうごきと増加図書冊数

表3　図書購入費の推移（公立図書館）

年度	名目図書費(100万円)	新刊図書平均単価	平均図書単価指数	実質図書費(100万円)	図書購入冊数	図書購入単価
1958	305	382	1.00	305	829,684	368
1959	332	412	1.07	310	827,201	396
1960	350	441	1.15	304	853,353	409
1961	404	516	1.35	299	912,470	443
1962	478	652	1.70	281	937,860	509
1963	536	670	1.75	306	1,012,870	530
1964	602	830	2.16	278	1,022,925	588
1965	678	821	2.15	315	1,095,175	619

表3は，公立図書館全体の図書購入量のうごきを調べたもので，1958年を基軸に新刊図書の平均単価を指数として公立図書館の名目図書費を除したもので，その実質図書費を算出したものである。これでみると，1958年と1965年では名目図書費は2倍強にふえているに拘らず，実質上では1千万円の増しかみていない。この1千万円の増は，図書館数の増に結びつくものであるので1館1館の単位にした場合は，殆んど増加の傾向はないことになる。しかしながら図書購入冊数は，8年の間着実に伸びている。'58—'65年の間に約27万冊の増であるが，このことは図書購入単価（名目図書費を購入冊数で除したもの）の推移でわかるように，新刊図書の平均単価との間に純然たる比較差違がでていることによる。1965年新刊図書の平均単価は2.15倍，一方の図書購入単価は1.68倍であり，821円と619円では200円近くの差が生じている。以上まとめると，図書館数の増はあっても実質的図書費増を伴わず，また図書単価の上昇にさえも追いついていず，いきおいそれをカバーする手段として図書の購入冊数を維持するために安価な図書で補っているといえ

るのではなかろうか。

読書運動を開始するに際して，また継続発展させるに際して，基本の主要財である図書は，十分に確保されなければならない。長野県におけるＰＴＡ母親文庫も，鹿児島県における母と子の20分間読書運動も，1964～66年度においては，一様に献本運動が行なわれた。“愛の一冊寄贈運動”，“心に火をたく献本運動”などのキャッチフレーズのもとに展開された理由は，運動の広範囲な拡がりに追従しえない図書の不足を補充する案出であったといえる。

戦後の読書運動は，民衆自身の積極的な参加による大衆運動の形態をとった。その多くは，不読者層の開拓に主眼が傾注され，図書を身近なものとすることで具体的な形態をとった。熊本県の八代市では，図書館の本を読んでも読まなくても１年間町内の各家庭に貸し出した。１年後にその半数は，図書館との接触を深めていったという。こうした意味合いからは，地域住民の身近な場所に読書施設を遇さねばならないことの必要性が推量できるが，先述した図書購入費のような条件下では，とてもその意を満たせるものではない。献本・献金運動なる性質のものは，図書館活動（読書運動）が十分努力されていると認められないと，成功のおぼつくものではない，がとにかく地域住民の税外負担となるので最後的にとられる手段ではある。

ここで問題となるのは，図書館が不足するから読者数が獲得できないのか，またはその反対に読者数が少ないことによって図書費が不足するのかの因である。多くは前者である傾向が強いが，読書運動と図書費の関係は非常に緊密である。図書費と読者数の相乗作用をもたらすよう努力していくことは，近々の肝要事である。

註

1）鈴木賢祐：図書館開発（山口図書館だより78：2—4）
統計表は，日本図書館協会発行の「日本の図書館」と，出版ニュース社発行の「出版年鑑に」よる。

Summary

The main purpose of the reading movement managed by public libraries is to widen the stratum of users. There are quite a few regions that have no public library at all, so many people are not able to benefit from library services. Therefore, our direct aims are to bring services to such areas and gain wider use of libraries by those within the present service areas.

The total number of public library-card holders in 1966 was about one million, including 220 thousand using book mobiles. This is only 1% of population ——too small indeed! A total of about 1,033 million copies were loaned out, which is 10 copies per individual a year. Registered rural-reading groups totalled 32 thousand. For the sake of these groups, we endeavoured to secure as many book stations as possible, to offer suitable books, and to organize users by means of local reading circles or meetings. Everywhere the most important problem was the finding and instructing of group leaders.

In order to improve reading interests, recommended reading lists and book reports were furnished. Increasing the number of books in circulation is the most pressing problem. Though the money spent on books increases yearly, prices rise so fast that the number of new copies per year dose not increase. This creats a drawback in increasing the number of readers.

1966年の読書界*

—国内時潮—

東京学芸大学　北島武彦**

1　月

昭和40年度朝日文化賞決る

昭和40年度朝日文化賞は18件（19氏，1団体）に授賞と決ったが，文化賞は次のとおり

部落問題研究における業績　社団法人部落問題研究所（代表　奈良本辰也）

中国法制史研究への貢献　仁井田陞

「渋沢栄一伝記資料」の完成と日本近代経済史の資料集成への貢献　土屋喬雄

日本美術についての広範な啓発活動　矢代幸雄

日本映画を国際的地位に高めた功績　黒沢明

元素の起源と星の進化に関する研究　林忠四郎

アマチュア野球，ことに高等学校野球の育成，発展に多年尽した功績　中沢良夫，佐伯達夫

芥川賞，直木賞決る

第54回芥川賞，直木賞の選考委員会は17日東京でひらかれ，芥川賞は高井有一「北の河」（「犀」4号），直木賞は新橋遊吉「八百長」（「讃岐文学」13号），千葉治平「虜愁記」（「秋田文学」23～27号）の各氏に決った。

大作「青年の環」近く15年ぶりに完結

長らく未完成だった野間宏氏の小説「青年の環」が15年ぶりに完結されるという。その第1巻（第1～2部）はすでに河出書房より出版されているが，完成すれば5部作，全4巻，原稿用紙5千枚の大作となる。この小説は裕福な青年と恵まれない青年の2人の主人公を対極とし，第2次大戦直前の3ケ月間の状況を背景として，戦争・部落問題・青年と左翼運動・性などさまざまな問題を扱っている。

三島氏ら受賞　芸術祭賞　奨励賞

第20回芸術祭賞授賞式は20日，東京国立教育会館でおこなわれた。中村文相から脚本「サド侯爵夫人」の作家三島由紀夫氏等に芸術祭賞，同奨励賞が与えられた。

第17回読売文学賞決る

第17回読売文学賞が次のとおり決った。

小説賞　庄野潤三「夕べの雲」

戯曲賞　「北条秀司戯曲選集」

伝記賞　柳田泉「明治初期の文学思想」

詩歌・俳句賞　那珂太郎「音楽」，柴生田稔「入野」

研究・翻訳賞　中西悟堂「定本野鳥記」

現代に生きる「漱石」　根強いブームの背景

今年は漱石の生誕百年に当るというので，講演会やら展覧会，出版界でも大変なブームにわき立っている。同じ明治の文豪といっても森鷗外や幸田露伴などとは人気の点で一ケタも二ケタもちがっているようで，外国でいえば，さしずめシェークスピア級である。

3　月

菅野照代氏に第28回オール読物新人賞

第28回オール読物新人賞は菅野照代氏「ふくさ」に決った。

生野氏ら3人　第9回高村光太郎賞

第9回高村光太郎賞は8日，次の3氏に決った。

造型部門　彫刻「裸婦」　一色邦彦，同「テンションとコンプレッション」　篠田守男

---

*　Domestic informations on reading

**　KITAJIMA, Takehiko (Tokyo Gakugei University)

詩部門　「生野幸吉詩集」（思潮社刊）　生野幸吉

第5回女流文学賞決る

第5回女流文学賞は11日の選考委員会で，円地文子氏の「なまみこ物語」に決った。円地文子氏には「女坂」，「女面」，「ひもじい月日」等の著書がある。

トインビーに打込む“電力の鬼”

世界的なイギリスの歴史家 A.トインビーの主著「歴史の研究」の完訳実現にわが国電力界の長老松永安左衛門氏が全力を傾注している。テキストで全12巻，優に6千頁をこえ，邦訳で各巻5百頁平均，24巻になるという。

中島河太郎氏に　日本推理作家協会賞

第19回日本推理作家協会賞は12日，中島河太郎氏の「推理小説展望」（東都書房刊）その他の評論活動に決った。

学士院賞決る

日本学士院は12日の総会で昭和41年度の恩賜賞，日本学士院賞の受賞者を次のとおり決めた

恩賜賞　「原始仏教聖典の成立史研究」　前田恵学（東海学園女子短大教授）

学士院賞　「平安朝伝来の白氏文集と三蹟の研究」　小松茂美（東京国立博物館書蹟室長）

同　「ビトリアの国際法理論」　伊藤不二男（九大法学部教授）

同　「近江商人中井家の研究」　江頭恒治（滋賀大学経済学部教授）その他4件

第6回田村俊子賞決る

第6回田村俊子賞は14日，萩原葉子氏「天上の花」（新潮社刊）に授賞と決った。

第22回文学界新人賞決る

第22回文学界新人賞は17日，野島勝彦氏「胎」に決った。

吉野作造賞に衛藤，坂本両氏

中央公論社が論壇を対象に新設した第1回吉野作造賞は22日，衛藤藩吉氏「日本の安全保障をどう高めるか」，坂本義和氏「日本外交への提言」の2編に決った。

芸術選奨決る

第16回芸術選奨の受賞者が22日発表されたが，文学部門では作家丸岡明氏が短編集に収められた「静かな影絵」，「街の灯」などにより受賞し，評論部門では文芸評論家尾崎秀樹氏が「大衆文学論」で受賞した。

4　月

サトウ・サンペイ氏らに文春漫画賞

第12回文春漫画賞は2日，次の各氏に授賞と決った。

サトウ・サンペイ「フジ三太郎」，「アサカゼ君」等の平均的サラリーマンの日常感覚を表現した風刺漫画

クロイワ・カズ　単行本「Eye for eye」

芸術院賞受賞者決る

日本芸術院は6日，昭和40年度恩賜賞と院賞の受賞者を次のとおりきめたが，第2部（文芸）関係は次のとおり

恩賜賞　池部鈞　洋画界につくした功績に対し

院賞　中山義秀　小説「咲庵」（しょうあん）等の功績に対し，永井竜男　小説「一個その他」等の功績に対し，舟木重信　評論「詩入ハイネ—人と作品」に対し，山本健吉　評論「芭蕉」の業績に対し

漱石の新資料がぞくぞく

生誕百年を記念するかのように，漱石の新資料がぞくぞく発見されている。大正6年から漱石全集を刊行し，今年8回目の新版を編集している岩波書店にはすでに70余点が集められている。内容は書簡が一番多く50数点，ほかに漢詩，俳句の類もあるが，珍らしいのは英会話によせた序文で，これは明治43年海軍兵学校教官をしていた教え子の川井田藤助氏へあてた手紙の中から発見されたもので，有名な漱石山房の原稿用紙6枚にきちょうめんなペン字で会話の重要性をといたものである。

道徳指導資料第3集できる

小中学校の「道徳指導資料」第3集が16日文部省で出来上った。1昨年から毎年1集ずつ出されて来たが，この

第3集で道徳の指導資料は完結することになる。第1，2集と同じように「愛国心」，「人間愛」，「社会道徳」などの徳目に重点がおかれているが，今回は特に自分の職業に対する努力，責任感を強調する「職業観」がとりあげられているのが目立つ。この指導資料は小学校1年から中学校3年まで各学年ごとに編集されたもので，材料は古今東西の童話・伝記・名作から集められている。これらの中には戦前の教科書にあった「江戸城の明渡し」の勝海舟と西郷隆盛，「青年よ大志を抱け」のクラーク，野口英世の立志伝等が20年ぶりに復活している。

三つの中国語辞典　日中学界友情の協力で編さん　順調にすゝむ

海を越えた日中両学界の友情と協力で，3種類の現代中国語辞典の編さんが順調にすすんでいる。愛知大学編「中日大辞典」は中国側の好意で接収を解除された旧東亜文書院所蔵のカード約14万枚を基礎にしたもので11月刊行される。また北京の商務印書館編「漢日大辞典」は中国側で書いた原稿を日本側の倉石武四郎中学院長らが校訂，日本で印刷し，来春両国で同時に発売される。中国側はお世話になったお礼に昭和45年刊行を目標に倉石氏らが編さんしている「日中辞典」の校訂を引きうけることになった。

5　月

児童福祉文化賞決る

厚生省は昭和41年度（第8回）児童福祉文化賞（厚生大臣賞）を図書1点，映画2点，児童劇1点，放送テレビ番組1点に贈ることを決めたが，図書の部では加藤明治著「水つき学校」（東都書房刊）が受賞した。

第13回産経児童出版文化賞決る

第13回産経児童出版文化賞は5日，次の作品に授賞と決った。

加藤陸奥男　少年少女日本昆虫記　全5巻　牧書店
安藤美紀夫　水四澄子画　ポイヤウンベ物語　福音館書店
生源寺美子　草の芽は青い　講談社
リンドグレーン著　大塚勇三，尾崎義訳　リンドグレーン作品集　全12巻　岩波書店
山内義雄・高橋義孝・山室静等編　国際児童文学賞全集　全12巻　あかね書房
さ・え・ら伝記ライブラリー　全10巻　さ・え・ら書房

日本児童文学者協会賞決る

第6回日本児童文学者協会賞は9日，次の作品に授賞と決った。

今西祐行　「肥後の石工」（実業之日本社刊）
那須田稔　「シラカバと少女」（同上）

「一千日」に全米図書賞

このほどアメリカで毎年もっとも注目をあびる全米図書賞の受賞作が決った。これは文学の各部門にわたって，前年度の最高作にあたえるもので，賞金は1人当り千ドル，小説ではさいきん映画にもなり，現在翻訳進行中の評判作「愚者の船」の作者キャサリン・アン・ポーターの「短編全集」にあたえられ，詩では新進のジェイムス・ディッキーの詩集「バックダンサーの選択」，エッセーではジャネット・フラナーが週刊誌「ニューヨーカー」に20年来書きつづけてきたパリ通信を集めた「パリ日記」が，歴史・伝記部門ではハーバード大学史学教授でケネディ大統領側近の1人であったアーサー・シュレジンガーの政治回想録「一千日」が選ばれたが，これは名実共に本命の当り作である。

盛況のH氏賞授賞会

日本現代詩人会の本年度H氏賞は入沢康夫氏の「五月の詩祭」に贈られ，その授賞会が23日夜，東京の紀伊国屋ホールで盛大にひらかれた。入沢氏は明治学院大学助教授，フランスの幻想的詩人ネルバルの研究家で，知的でロマネスクな作風の詩人である。

6　月

ソ連で現代日本文学の紹介盛ん

ソ連の海外文学専門誌「イノストランナヤ・リテラトゥーラ」（外国文学）5月号に安部公房の長編「砂の

女」が翻訳，掲載されたが，このところソ連では日本の現代文学の翻訳が盛んで，遠藤周作「海と毒薬」，五味川純平「人間の条件」，松本清張「深層海流」，開高健「巨人と玩具」など，作品選択もバラエティに富んできた。

集めた資料数千点　「戦史文庫」を作る中野五郎氏

戦史研究家の中野五郎氏はこれまで集めた数千点の資料を中心に，戦史文庫を作ろうとしている。同氏は元朝日新聞記者で，この40年間に集めた資料は5千点を越え，戦況報告，記録，回想録，戦史などが主なもので，中には第2次大戦前米国で出された排日文書や宣伝資料「日本人と中国人の見分け方」といったようなものまである。

吉村昭氏に太宰治賞

第2回太宰治賞は18日，吉村昭氏の「星への旅」（筑摩書房刊）に決った。同賞は雑誌「展望」の復刊を記念して昨年設けられた文学賞で，記念品と副賞30万円である。

三氏にエッセイスト・クラブ賞

第14回日本エッセイスト・クラブ賞は25日，次の3氏に授賞と決った。

白崎秀雄　「真贋」（講談社刊）

西山卯三　「住み方の記」（文芸春秋刊）

阿部孝　「ばら色のばら」（高知新聞社刊）

秋山氏に第1回長谷川伸賞

第1回長谷川伸賞に演劇評論家秋山安三郎氏が決まり，26日授賞式がおこなわれた。同賞は故長谷川伸氏を記念し，大衆文芸や演劇等の分野で功労のあった人，または新人を対象に授けられるもので賞金は10万円，秋山氏は「多年にわたる演劇評論」の功によりおくられた。

7　月

江戸川乱歩賞決る

江戸川乱歩賞選考委員会は1日，昭和41年度（第12回）の受賞作を斉藤栄氏の「殺人の棋譜」と決めた。

直木賞に立原正秋氏

第55回芥川・直木賞の選考委員会は18日ひらかれ，芥川賞は該当作なく，直木賞に立原正秋氏「白い罌粟」（「別冊文芸春秋」94号）ときまった。立原氏はソウルに生れ，早大国文科を中退，主な作品は第51回の芥川賞候補となった「薪能」はじめ，「剣ケ崎」，「漆の花」等がある。

アラビアン・ナイト　原典の直接訳に打ちこむ前島氏

アラビアン・ナイトがアラビア語源典から直接日本語に翻訳される。幾通りもの日本語訳が出ているが，いずれも英，仏，独語に一度訳されたものをテキストとする重訳で，原典からの直接訳は今度がはじめてである。すでにその第1巻は平凡社から刊行されているが，訳者は慶大東洋史の前島信次教授である。

8　月

チャーチル伝記　近く第1巻出版

「ウィンストン・S・チャーチル」伝（全6巻）が目下彼の息子ランドルフ氏の執筆，編集で進められているが，その第1巻が近くロンドンのハイネマン社から出版されることになった。

9　月

鈴木佐代子氏に女流新人賞

第9回婦人公論女流新人賞は鈴木佐代子「証文」に決った。

第14回地上文学賞決る

第14回地上文学賞（主催　家の光協会）は藤田博保氏の「十六才」（「地上」9月号）に決った。

国際アンデルセン賞決る

第6回（1966年度）国際アンデルセン賞（スイス国際児童図書協議会主催）の授賞作品が決ったが，6日日本の作品として福田清人氏の「春の目玉」（講談社刊）が受賞したと発表された。

谷崎潤一郎賞　「沈黙」へ

第2回谷崎潤一郎賞は16日，遠藤周作氏の「沈黙」に決った。

「期待される人間像」最終報告

これからの国家社会で，必要な人間とはどういうものでなければならないか—いわゆる「期待される人間像」の最終報告が，19日文部省でひらかれた中央教育審議会で了承された。これは第19特別委員会（主査　高坂正顕東京学芸大学学長）を中心に「期待される人間像」の検討をすすめ，昨年1月その中間草案を発表したが，今度の最終報告は中間草案に対する各方面からの反響をおりこんで修正したものである。

第23回文学界新人賞決る

第23回文学界新人賞は22日，次の各氏に授賞と決った。

宮原明夫「石のニンフ達」，丸山健二「夏の流れ」

近代文学館に高見順文庫

ガンとのきびしい斗いで世間の感動をよんだ作家高見順氏をしのぶ会が21日，東京でひらかれた。この席上，日本近代文学館理事長伊藤整氏から，高見氏の蔵書約1万5千余冊を中心に，雑誌2万冊，文庫本など約2万冊が近代文学館に寄贈され，「高見順文庫」を設けることが披露された。

10　月

文芸賞決る

復活第1回文芸賞（主催　河出書房新社）は入選作として金鶴泳氏の「凍える口」を選んだ。

農村青年が見事当選　モスクワ放送の懸賞小説

神奈川県小田原市早川でミカン栽培をしている大津一太さん（32才）がモスクワ放送募集の懸賞小説に応募した「草の根大根」が1位で当選，11日モスクワ放送の招待で横浜港からバイカル号でモスクワへ出発する。

野間児童文芸賞決る

第4回野間児童文芸賞は福田清人氏の「秋の目玉」（講談社刊）に授賞と決った。

悪質な週刊誌は反省を　全国金沢マスコミ大会

マスコミ倫理懇談会全国協議会など主催の第10回全国マスコミ金沢大会2日目の5日，「情勢対策」分科会で「悪質な週刊誌，映画，広告にはマスコミ倫理懇談会全国協議会から反省を申入れる必要がある」と意見がのべられた。

名古屋，岐阜両市で新聞大会

「新聞で見る知る正しく批判する」の標語の下に第19回新聞週間が20日からはじまるが，週間中の最大行事，新聞大会が名古屋・岐阜の両市で関係者約430名の参加の下におこなわれる。

文化勲章3氏に　文化功労者を東山千栄子さんら7人

今年度の文化勲章は「本日休診」などユニークな小説で知られる井伏鱒二氏，日本画の徳岡神泉氏，結晶化学研究の仁田勇の3氏に贈られる。文化功労者はこの3氏のほか，新劇の東山千栄子，ジャーナリストの高石真五郎，法理学の恒藤恭，「日本文学史」を集大成した久松潜一，物理化学の堀場信吉，皮膚病学・梅毒学の松本信一，工芸の山崎覚太郎の7氏が選ばれた。

両ユダヤ人作家に　ノーベル文学賞決る

今年度のノーベル文学賞はイスラエルの作家シュムエル・ヨゼフ・アグノン氏とドイツ生れのユダヤ人（現在はスェーデン国籍）で詩人のネトー・ザクス女史の2人に授賞と決った。スェーデン王立アカデミーはアグノン氏の作品については「ユダヤ人の生活をモチーフにした，きわめて個性的な物語」，ザクス女史については「イスラエルの運命を力強く描いた，見事な叙情的，劇的作品」とのべている。

司馬遼太郎氏らに菊地寛賞

第14回菊池寛賞は21日，次のとおり決った。

司馬遼太郎　新鮮な史眼による小説「竜馬がゆく」，「国盗り物語」の完結

石坂洋次郎　常に健全な常識で明快な作品を書きつづけた功績

毎日新聞社外信部　「燕山夜話」をいち早く紹介し，中国の文化大革命を報道した業績

博物館・明治村　民間独自な力で明治の文化財の保存，再現につとめつつある努力

11 月

第9回日経経済図書文化賞決る

第9回日経経済図書文化賞は3日，次のとおり決った。

富永健一　社会変動の理論　岩波書店

西川俊作　地域間労働移動と労働市場　有斐閣

伊藤政吉　アメリカ金融政策　岩波書店

尾高邦雄　日本の経営　中央公論社

野田一夫編　戦後経済史　日本生産性本部

第20回毎日出版文化賞決る

第20回毎日出版文化賞は3日，歴史学研究会編「日本史年表」（岩波書店刊）他10点に授賞と決定，うち特別賞は次の作品に与えられた。

家永三郎等編　日本文化史　全8巻　筑摩書房

横山隆一　勇気（漫画筆）　日本YMCA同盟出版部

野間文芸賞に井伏鱒二氏

第19回野間文芸賞は10日，井伏鱒二氏の「黒い雨」（新潮社刊）に授賞と決った。

第2回日本翻訳出版文化賞決る

第2回日本翻訳出版文化賞は15日，次の作品に授賞と決った。

理想社　カント全集　第15巻「自然地理学」（三枝充悳訳）

筑摩書房　世界文学大系　第76巻「パミラ」（サミュエル・リチャードソン著　海老原俊治訳）「トリストラム・シャンディ」（ローレンス・スターン著　朱牟田夏雄訳）

人文書院　「転身物語」（オヴィディウス著　田中秀央，前田敬作訳）

タイム・ライフ・インターナショナル社　「ライフ人間世界史」の「古代ギリシァ」（C．M．バウラ著）「ローマ帝国」（モーゼス・ハダス著　日本語版　村川堅太郎監修　タイム・ライフ・ブックス編集部編）

新潮社文学賞　阿川，萩原両氏に

第13回新潮社文学賞は15日，阿川弘之氏の「山本五十六」（新潮社刊），萩原葉子氏の「天上の花—三好達治抄—」（新潮社刊）の作が受賞と決った。

12 月

第10回農民文学賞決る

第10回農民文学賞（主催　日本農民文学会）は大岩鉱氏の「杉っぺ菩薩」（小説・「詩と散文」13号）に決った。

第13回小説新潮賞決る

第13回小説新潮賞は3日，青山光二氏の「修羅の人」（講談社刊）が受賞した。

加藤，松田両氏に　第6回室生犀星賞

第6回室生犀星賞は7日，加藤郁平氏の「形而情学」（昭森社刊）と松田幸雄氏の「詩集1947—1965」（地球社刊）に決定した。

（注）本稿をまとめるに当り，「朝日新聞縮刷版」と「出版年鑑1967」を参考にした。

海外の研究情報*

野間教育研究所　高木和子**

第1回国際読書学会議

8月8日，9日の両日，パリのユネスコ本部で第1回の国際読書学会議が開催された。テーマは，「世界中の読みの改善」で，24ケ国より500名の参会者があった。本学会からも阪本一郎会長，尾原淳夫理事が出席，阪本会長は日本の読書界の展望について発表された。この会の内容その他については「読書科学35号」に掲載されて

いるので省略する。

第11回ＩＲＡ年次研究大会

この大会は5月4日から7日までテキサス州ダラス市で開催された。中心テーマは，「読みについての見とおし（Vistas in Readnig)」で，現場の教師向きの10の分科会と，専門家・研究者向きの10の部会とに分かれて研究発表が行なわれた。さらに，シンポジウム・討論会・文学の夕べなどの催しもあった。主な内容を次に紹介する。

a）分科会

10の主題について，小学校低学年，小学校高学年，中学校，高等学校，大学の4つの学年水準別に発表が行なわれた。10の主題とその主な内容は次のとおりである。

1　発達読書

各学年水準における発達的な読みのスキルの問題，その指導法などについての発表があった。

2　理解力の確立

思考過程としての読み，理解をともなった読みの発達，他教科における読み，文学の読みなどがとりあげられた。

3　読みの教育の一部としての文学

永続きする娯楽的読書興味の確立，明かるい未来の創造のための文学指導，個別化・個性化した文学，読みきかせることによる文学への導入などについて。

4　読書材料

基礎教科書・補充教材の使い方，テレビの利用法，視聴覚教材の利用，読書材料の読みやすさの問題等について発表があった。

5　組織化された教室指導

教室指導における組織化のしかたと，それに関連した指導計画についての問題が，特に個人差に留意した観点から報告された。

6　読みのカリキュラムの作成

各学年水準におけるいろいろなカリキュラムの案が発表された。

7　注目すべき読みの指導計画

デトロイトで行なわれているプロジェクト，英・米の比較，各学年水準ごとの指導計画の問題点，スカンジナビアの高校でのプログラム等が報告された。

8　読みのカウンセリングとガイダンス

教師や臨床家のガイダンス，強度不振児に対する指導，大学におけるガイダンス計画での臨床家の役割などについて。

9　学級内における矯正指導

読書困難の予防，診断，教室内での指導のしかた，矯正場面における個別指導，学年水準別の読書困難の発見と治療等について。

10　緊急問題

読みのレディネス完成の見極わめ方，ｉ．ｔ．ａ．（入門期用アルファベット）の使用について，治療指導に未訓練職員を用いないこと，近代化した社会が要求する読み，読みの教師の教育程過の問題などがとりあげられた。

b）部　会

10の主題の下でいくつかの下位テーマについて発表が行なわれた。それらの主な内容は次のようであった。

A　読みの教師の教育

1. 就職前（学生時代）の教育
2. 在職中（現場の教師）の教育
3. ＮＤＥＡ(National Defence Education Act)主催の講習会の評価
4. 読みの専門家の必要性について

B　読みの指導への言語学の導入

1. 展望
2. 学童期初期のあつかい方
3. 授業への言語学の導入
4. 言語学の多方面への貢献

C　環境的影響による読みの問題

---

*　Informations abroad on the study of reading

**　TAKAGI, Kazuko (Noma Institute of Educational Research)

1 children without に対する読みのプログラム
2 文化的に不遇なものの特性
3 二重母国語：実際的活動
4 二重母国語の子どもに対する読みの指導

D リテラシーの普及
1 傾向と見通し
2 成人文盲に対する最近のプログラム
3 教材と指導法
4 公共団体の役割

E 個別化された読みの教育
1 個別化された読みのプログラムの発達
2 個別化された読みのプログラムの実施
3 個人差に対する対処
4 個人的読書

F 一年生の読みについての国家的研究
NCRE (National Conference of Research in English) 共催
1 展望
2～4 特殊研究：レディネス期，入門期における，従来の指導法の新しい指導法との長短の比較研究が中心になっている。

G 研究報告
1 低学年について
2 「弁別」についての研究
3 修正された教材と指導法の効果
4 その他の報告

H 研究計画
1 研究計画の欠点の改善
2 計画立案に対する示唆
3 応用
4 研究計画上の観察報告

I 読みの多規律的側面
1 読みの心理学
2 知覚
3 読みの不振における神経学的要因
4 読みの不振児のあつかい方

J 読みにおける評価
1 評価のいろいろな側面
2 クラス担任教師による評価
3 評価におけるプログラム
4 臨床家による診断

c）シンポジウム

現場の先生を対象とする4つの主題のシンポジウムが，学年水準別に行なわれた。その4つの主題は次のとおりである。

1 研究結果とよりよい実践との結合
2 教師は研究結果をいかに応用したらよいか。
3 読みの専門家は研究結果をいかに応用したらよいか。
4 学校管理者は研究結果の応用をいかに援助すればよいか。

この他，12の主題別の自由討論会・説明会・公開授業・授業に関するフィルムの上映なども催された。

この大会では，従来からとりあげられていた読みへの入門期の指導に関する研究に力が入れられていることと，小学校時代からの文学教育，読書興味の問題などわが国では以前から重要視されていた問題がとりあげられはじめていることなどが目新しい傾向であるといえよう。

読みの教師のための講習会

合衆国教育庁主催の National Defence Education Act の講習会がアリゾナ大学で5週間にわたって開かれたのをはじめとし，各地の大学で，教師向けの夏期講習が催された。そのテーマとなったものを二・三あげると次のようである。

教室内での診断と治療の問題について（ロードアイランド大学）

読みの指導——実際性と柔軟性を中心に（ジャージー市州立大学）

読みにおける知覚的概念的発達（シラキュー大学）

この他，IRAの大会の前にも教師のための講習会がもたれた。

会　　報

常任理事会（3月27日）

1. 理事長の選出について――理事会の委託によって常任理事会が理事長の選出を行なった結果，阪本一郎氏が再選された。したがって会則10条により同氏が次期の会長となる。
2. ＩＲＡ年次大会への参加について――5月にシアトルで開かれる上記の大会には加賀秀夫，阪本敬彦の両氏が参加するので，本会の代表者として承認した。
3. ＩＲＡ会員の来日について――前会長 Bracken 夫人の引率する25名のＩＲＡ会員が観光をかねて来日するので，先方の希望によって次のように予定を組んだ。

   7月28日午前　区内小学校の授業参観と合同研究会

   7月30日夜　会食と自由討議
4. 昭和42年度大会の準備について――日時等について仮決定をした。

研究談話会（3月27日）

読書困難児の研究と問題点　　岡本奎六氏

常任理事会（4月24日）

1. 本年度大会について――8月7～8日，国立教育会館に決定。
2. 読書科学賞の選考方法について――会員及び関係有識者に授賞候補者の推薦を求めその結果にもとづいて選考委員会が決定する。同奨励賞については「読書科学」35，36，37号に発表の論文の中から会員の推薦を求める。

研究談話会（4月24日）

漢字の読字力の発達に関する研究　　福沢周亮氏

常任理事会（5月22日）

1. ＩＲＡ視察団の来日日程について――既報のとおり7月28日午前中渋谷区大向小学校で実地授業を参観。そのあと合同研究会。同30日八芳園で本会役員との懇談会と決定した。
2. ＩＲＡシアトル大会について――阪本（敬）加賀両氏は諸行事に参加して無事帰国した。1970年の第3回国際会議の候補地として日本とオーストラリヤがあげられているという。
3. 本年度大会について――「読書能力の開発に関する研究」を主題とする。その他の準備をすすめた。

研究談話会（5月22日）

ＩＲＡシアトル大会に参加して　　阪本敬彦氏　加賀秀夫氏

常任理事会（6月26日）

1. 総合研究の継続について――文部省に申請していた研究費補助は不採択となった。ぜひ継続したい領域については本会の予算でまかなうことにする。
2. 本年度大会プログラムについて――これを編成した。
3. 読書科学賞の選考について――この選考委員会は常任理事会が代行することにし，別掲のごとく予選をした。

常任理事会（7月18日）

1. 本年度大会について――準備をすすめた。
2. 会計監査について――監事からその報告がなされた。
3. 視察依嘱について――本会常任理事滑川道夫氏が渡米されるので，ついでにアメリカでの読書科学研究の実情を視察することを依嘱した。

読書科学賞選考経過

このことについては4月24日の常任理事会の決定にもとづいて，本会会員及び関係有識者に授賞候補者の推薦を依嘱したところ，多数の自他薦があったが，選考委員会において次の5件にしぼり，さらに本会理事の投票を経た。

(1) 鈴木徹造氏――“出版年鑑”の編集者。民間の事業として出版関係の貴重な資料である年鑑を編集している努力。

(2) 日本書籍出版協会――“日本の出版界――その歩みと現状”は日本の出版界及び関連産業を詳細なデータに基いて解説し，今までに類のないもので，その価値は高い。

(3) 鳥越信・森久保仙太郎氏――“3才から6才までの絵本と童話”（誠文堂新光社）が，絵本と童話の選び方与え方について，平易にしかも客観的なスタンダードを作った。

(4) 西原慶一氏――実践国語研究所を主宰し，月刊誌「実践国語」を編集発行して，読書に関する研究を促進した。

(5) 子どもの本研究会――“私たちの選んだ子どもの本”を編集発行して，子どもの読み物の選択に明確なスタンダードを作った。

投票の結果により選考委員会では満場一致で西原慶一氏に決定した。なお日本書籍出版協会は投票前に辞退された。

次いで読書科学研究奨励賞については会員の投票が大神貞夫氏に集中しており，選考委員会にも異論がなく，満場一致で同氏に決定した。

IRA視察団との合同研究会

IRA前会長 Bracken 夫人（現南メソジスト大学教授）を団長とする視察団28名が来日したについては，予定のとおり7月28日午前9時から渋谷区大向小学校（校長近藤修博氏）の協力によってまず実地授業を合同参観した。指導者は同校教諭赤松秀夫氏。3年1組。物語「アフリカのたいこ」（瀬田貞二作）の主題把握の指導であった。

次いで研究会を持った。赤松教諭に対する質疑応答，田中教諭の入門期指導の問題，近藤校長の同校教育全般の説明などで話は尽きなかった。正午散会。

30日午後7時から八芳園でのテンプラの会食に招待され，理事有志も参加して交歓した。

第11回研究大会（昭和42年8月7～8日）

後援　文部省，全国学校図書館協議会，日本図書館協会

会場　国立教育会館

第1日

午　前　　司　会　福沢周亮・室伏　武

10：00　漢字の読字力の発達　東京教育大学　福沢　周亮

10：25　語彙力の発達　東京学芸大学　河井　芳文

10：50　読みにおける柔軟性の発達

立正学園女子短期大学　岡田　明

11：15　読書不振児の研究(1)　野間教育研究所　阪本　敬彦

11：40　読書不振児の研究(2)　野間教育研究所　高木　和子

午　後

12：10　理　事　会

司　会　佐　藤　貢

1：30　大学生における速読訓練の効果について

東京教育大学　佐藤　泰正

1：55　身体疲労が読速度に及びす効果について

順天堂大学　加賀　秀夫

2：20　「若きウエルテルの悩み」は如何に読まれているか　三重大学　佐藤　貢

3：00　特別講演　ケストナー論

中央大学教授　高橋　健二

4：30　懇　親　会

第2日

午　前

9：30　総　会（別掲）

司　会　楮本　良平・西村　友円

10：25　読書不振児の治療教室

――読みの過程における問題について――

川越市立山田小学校　楮本　良平

10：50　読書能力の診断と読書生活の問題点

――読書教育のための基礎調査から――

豊田市立上鷹見小学校　伊予田　博

11：15　読解過程の研究

――読書態度の読解に及ぼす影響について――

東京大学　石原　敏道

11：40　学習技術としての読書能力

亜細亜大学　室伏　武

午　後　　司　会　岡田　明・加賀　秀夫

1：30　児童読み物の現状

新宿区立落合第二中学校　今村　秀夫

世谷田区立鳥山中学校○黒沢　浩

1：55　最近の出版界の動向（招待発表）

日本書籍出版協会　佐々木　繁

2：20　漫画サザエサンのユーモアの分析

日本女子大学　岩坂安希子

相模　優子

○阪本　一郎

友正　真子

3：00　特別講演　少年倶楽部の想い出

講談社顧問　加藤　謙一

理事会（8月7日）

1.　常任理事会の報告及び提案について――常任理事会からの昨年度の事業報告及び本年度以降の事業に関する提案を承認した。

2.　予算・決算について――昨年度決算を承認し，本年度予算について審議の上，別掲のように決議した。

3. 総会に提出すべき議案について――別掲のように決議した。

総会（8月8日）

(1) 会長あいさつ

(2) 事業報告及び事業計画

a．総合研究について

昭和41年度の文部省の総合研究費による「読書能力の開発の基礎的研究」は，既報のように3部門にわかれて研究をすすめ，本大会第1日に発表した段階まで到達した。続いて42年度も継続申請をしたが遺憾ながら不採択になったので，本年度は細々ながら会の予算の範囲内で研究を継続する。

b．標準読み物研究について

この特別委員会では，人格形成の系統的な発達課題に応ずる適書の選定を行なってきた。ようやくその選定を終わり，目下印刷中である。今秋，学芸図書KKから発行の予定。

c．機関誌の発行について

「読書科学」第10巻第4号は「1966年年報」として編集中のところ，まだ原稿が揃わないので遅刊している。

d．IRA関係について

昭和41年8月パリーで開かれた第1回国際読書学会議に阪本・尾原両氏が出席し，日本の読書界の展望について阪本氏が発表した。また42年5月シアトルで開かれたIRA年次大会には阪本(敬)・加賀両氏が出席し，日本の読書入門期の指導の研究について阪本(敬)氏が発表した。来年の第2回会議はコペンハーゲンで8月に，年次大会はボストンで5月に開かれる予定で，後者への招待はすでに届いている。会員をぜひ送りたい。

e．教育課程審議会に進言することについて

同会では教育課程の改善についての中間まとめを発表したが，その中で国語科の中に読書指導が計画的・組織的に行なわれるようにすることを方針としてあげている。このことについて具体的な意見と資料とをまとめて進言するため，特別委員会を発足する。

f．予算・決算の承認（別掲）

g．読書科学賞の贈呈（別掲）

昭和41年度決算

Ⅰ	収入	1,195,711円
	前年度くりこし金	29,797
	会費	342,960
	賛助会費	660,000
	売上金	69,600
	広告料	34,000
	第10回大会参会費	22,300
	印税	34,450
	利子	2,604
Ⅱ	支出	1,195,711円
	機関誌出版配布費	596,300
	同上負債返却	120,000
	第10回研究大会費	72,446
	人件費・謝金	126,200
	本部運営費	81,907
	消耗品・印刷費	51,250
	通信費・交通費	68,255
	研究会費	15,000
	次年度へくりこし	64,353
Ⅲ	残高	0円

昭和42年度予算

Ⅰ	収入	1,231,353円
	前年度くりこし金	64,353
	会費	400,000
	賛助会費	660,000
	売上金	50,000
	広告料	35,000
	第11回大会参会費	20,000
	利子	2,000
Ⅱ	支出	1,231,353円
	機関誌出版配布費	900,000
	第11回大会費	70,000
	人件費・謝金	120,000
	本部運営費	50,000
	消耗品・印刷費	30,000
	通信費・交通費	30,000
	研究会費	30,000
	雑費	1,353
Ⅲ	差引	0円

第１回読書科学賞

昨年度の総会において本会の創立10周年記年事業の一つとして読書科学賞規程が設けられたが，その第１回授賞者がつぎのように決定したので，賞状を贈呈した。

読書科学賞　西原慶一氏

実践国語研究所を主宰し，月刊誌「実践国語」を編集発行して，読書に関する研究を促進した。その昭和41年度の功績に対して。

読書科学研究奨励賞　大神貞男氏

昭和41年度に読書科学に発表した３編の読書療法に関する論文に対して。

受賞者略歴

西原慶一氏 [redacted]

実践国語研究所長（前日本女子大学講師）

大神貞男氏 [redacted]

千葉家庭裁判所主任調査官

読書科学　第10巻　総目次

原　著

石川清治　大学生の読書材へのアプローチについての調査　35—20

石川清治　読書の学年的発達と学部的特性の分析　36—16

大神貞男　家出少年の読書療法による治療例〔症例第４報告〕　35—1

大神貞男　非行少年の読書療法による治療例〔第５報告〕　36—9

大神貞男　非行少年の読書療法による治療例〔第６報告〕　37—18

岡本奎六　読書困難児の診断と治療指導の問題　36—31

楮本良平　児童の読書反応に関する研究　37—25

阪本一郎　「読書」と「読解」　36—1

阪本一郎・林久美子・亀井道子　読書感想文に見られる子どもの感動点の発達　37—1

佐藤貢　蒐書癖の研究　37—32

佐藤泰正　盲児の点字解読に関する発達的研究(2)　35—8

代田昇　読書教育を教育の一分野として確立するための提案　36—26

代田昇・増村王子　子どもの読書における地域の特質について　37—10

早津秀雄　読書指導において論理的な思考力を養うために　35—36

本宮久　小学校中学年における読書力開発の一研究　36—37

来明子　読書による意見変容の実験的研究　35—26

資　料

岡田明　速読に関する文献(1)　35—45

岡田明　速読に関する文献(2)　36—44

岡田明　ＩＴＰＡのしくみと適用　37—37

阪本一郎　日本の読書界の展望　35—41

高木和子　読みの能力の要因分析　37—45

昭和四十二年十一月十日発行（年四回発行）

Vol. 10, No. 4 November, 1967

THE SCIENCE OF READING

Edited by The Japanese Society for the Science of Reading
President : SAKAMOTO, Ichiro
c/o Department of Child Study, Japan Women's University, Japan.

CONTENTS

Feature Articles : The scope of reading, 1966.
Studies on reading,
educational, (1) reading apprehension ..... *MURAISHI, Shōzō* 1
educational, (2) reading guidance ..... *MUROBUSHI, Takeshi* 6
sociological ..... *FURUNO, Arichika* 11
psychological ..... *SATO, Yasumasa* 18
Scope of the publishing world,
in general ..... *KAWAKITA, Norio* 24
juvenile books ..... *IMAMURA, Hideo*
KUROSAWA, Hiroshi 28
juvenile magazines ..... *TANIKAWA, Sumio* 33
Reading movement of public library ..... *UYEDA, Kikuji* 37
Informations on reading,
domestic ..... *KITAJIMA, Takehiko* 42
abroad ..... *TAKAGI, Kazuko* 47
Official Notes 50

第10巻　第4号
＜通巻　第38号＞
昭和42年11月5日　印刷
昭和42年11月10日　発行

会員頒布（会員外頒価　300円）
東京都文京区目白台2—8—1
日本女子大学家政学部阪本研究室内
振替東京3213番
編集・発行者　日本読書学会
代表　阪本一郎
発行所　日本読書学会

印刷・第一印刷株式会社